

本朝公信附属書類

上

139	第十類
三冊	大
三十五架	上
函	

国立公文書館

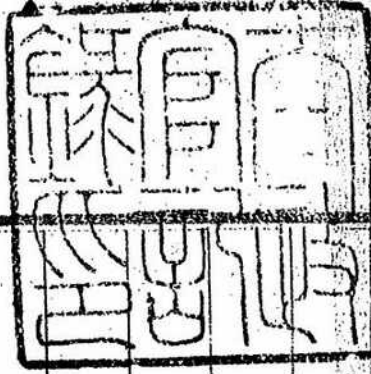
分類

排架番号

2 A

33-6

① 318



大使事務取扱掛ノ者左ノ通

内史一同

宮本外務少丞

外務省七等出仕 大原重實

大藏省七等出仕 坂部長熙

石渡租税大属

齊藤戸籍大属

古谷租税権大属

松来司法中録

難波司法少録

竹内宮内権大録

櫻井宮内中録

文部省ハ等出仕西

瀉

訥

織田文部少錄

森少辨務使附属ノ名和道一ヨリ別紙寫ノ通願書差出且
森ヨリ申越候趣ニテハ当人願意御許容可相成歟又ハ花
頂宮殿下御事輔佐一人御懇願ノ譯モ有之候相御都合ニ
寄其任ニ轉勤被仰付候歟兩条ノ内御沙汰相成度旨ニ付
夫是恭酌勘辨仕候處一体中年以工ノ者職ヲ海外ニ奉
候時ニ当リ洋語不解ニテハ素ヨリ其任ニ堪申間敷且學
科作業致候氏少筆輩ノ如ク不知成業ニ可呈ノ頃ニ無
就テハ速ニ歸國適宜ノ官職ヲ奉ヒ候方却テ本人報國之
素志ニモ相違可申歟存候乍太深ク其不學ヲ悔悟ヒ報
國ノ為ノ一途ニ存込歟願仕候義ヲ斷然異議申立候テハ
大ニ其情実ヲ誤候事無之氏雖申就テハ於御評議被下御
沙汰御座候様仕度此段相伺候也

年未、月日八日
正院
外務省

御中

一月一日

同、維、出使時命全權大使へ相達所分爲致候
間、其旨可相心得事

道一儀不肖ノ身ヲ願ヒス本國在留辦務權少記ノ任ヲ冒
シ渡海仕候處元來弱年ヨリ僻境ニ生長シ固陋ニ安シ海
外各國ノ國語等更ニ學ハス漸ク今日ニ至リ俄ニ小兒ノ
學ヲ習ヒ候位ノ事ニテ實ニ愚モ甚シキ次第就テハ本
國奉命ノ節猥リニ不當ノ任ヲ拜シ渡海仕候モ今更奉恐
入候ヘトモ實ニ其國ノ國語等假成ニモ不相通候モノニ
テハ假令小吏シリモ公使館ノ用便ハ相勤リ兼殊更會計
等ノ事務ハ最初ヨリ他人ノ扶助ニテ今日ニ至リ候次第
實ニ其任スル所ヲ辱メ候仕合重疊奉恐入候間何卒当職
被免候様奉願候然レ處者後頻リニ我愚ヲ追悔シ晩年ナ
カウ國語等ニ打立候際ニテ元ヨリ壯年日進ノ輩トハ日
ヨ同シク論スヘカラス候ヘトモ少々成トモ其効ヲ得他

日國家ノ一助ニ供シ度然ルニ是迄少々民政等取扱候事
モ有之候ニ付假成用使等相通ニ候上ハ當府民部省ノ所
行又ハ諸州國府ノ有様等実地ニ當リ取調度候間此等ノ
名義ヲ以テ滞學被差許候様奉款願候尤此迄モ學問ノ基
礎充分有之候者トハ同日ノ論ニハ忝リ無可申哉旁不堪
想縮候ハ此何卒格別ノ譯ヲ以テ御間濟ノ程奉願工候右
辭表ハ直ニ本省ハ可差出答式ニ候ハ氏更ニ款願ノ次第
モ有之候間仰願ノ貴下ヨリ前条ノ次第実地ノ情実ヲ以テ
其筋ハ可然御裁成奉願候以上

辛未九月

名 和 道 一

森 少 辨 務 使 殿

條約書御親證ノ寫

天佑ヲ保有シ萬世一系ナル皇祚ヲ承レ
大日本國天皇御名ノ委任全權ノ重臣ト
澳地利皇帝婆希密等ノキン兼洪噶利アホストリツクキ
陛下ノ全權重臣ト會議締約シタル和親貿易航海ノ条約
左ノ如シ

條約

右條約定則トモ親ク通覽シ其旨趣至當ナリトス故ニ天
地ト悠久ヲ期シテ之ヲ固守シ國內人民ニ普ク遵行セシ
メンヲ約ス之ヲ定証セシ為メ朕カ名ヲ記シ國璽ヲ鈐
セシム

明治四年辛未十二月三日

御名

御印章

奉勅

正四位外務卿副島種臣

第三号

聖上益御清穆被為在御座恐悅、至此事ニ存候大使初御
一行御安泰、条珍重存候本省卿輔初孰レモ無異事御放
憲可被成候扱第一号書翰申進候通リ澳地利公使当月三
日恭

朝同日延遼館於、本條約交換無滞相濟響應例、如レ右
条約御親證勅語并ニ言工振等在別紙

但条約書御親證、奉勅是迄大臣、蒙此度外務卿、
相成候事

一此度省中ニ於テ日記課御取設相成坂田中録加藤少録
堀江権少録、被命以來省中事務大小無遺漏可稿録被仰
付候事

一米輸出ノ義ニ付各國公使等へ、達書別紙ニテ御承知

可被成尤右規則ノ義ハ方今取調中ニ有之候事
一兵庫地所一件ニ付英公使ヨリ返翰差越シ候ニ付右ノ
答翰トモ二通馬御心得迄ニ差進候事

一榎本金次郎石炭一件ニ付英公使ヨリ甲号書翰差越乙
号ノ通御返翰相成右一件ハ公使今便本國政府ヘ差送り
政府ノ公裁ヲ可乞旨申立候間此段御含置可有之候
一丙号長崎縣届出耶蘇一条ハ事實取調中ニ候ヘトモ御
心得無之テハ不叶義ト存候ニ付不果敢右馬差進候様事
實得詳細候上後便可申進存候
右條々申進候也

辛未十二月五日

大	原	重	實
平	井	少	記
子	安	少	記

石	橋	大	記
花	房	大	記
宮	本	少	丞
楠	本	少	丞

田邊少丞殿
渡邊少記殿

追テ第一号御用信去月廿九日佛郵船ヲ以テ可差出
筈ニテ廿八日夜神奈川縣ヘ相達候處夜中積込難出
来其為延滞無據今便併テ差立候様相成不都合ノ段
不惡御承含有之度候也条約改定ニ係ルジャツパン
ハラルトノ拔萃譯御心得ノ為ノ差進候

澳地利辦理公使へ

勅語寫

貴國皇帝必全ナルマ今般汝ヲ登シテ辦理公使ヲラシム
乃チ其委任ノ國書ヲ得テ朕之ヲ領ス爾來汝カ能ク其職
ヲ奉シ兩國ノ交際益親密ナラシメ望ム且別ニ皇帝ノ親
書ヲ了シ其意ノ厚キヲ感荷ス將展覽會ノ事ハ重臣ニ命
シ於詳ニ問ハシムヘシ

同公使言上振

澳地利哄噶利皇帝陛下余ヲ其辦理公使ニ任シ
閣下ニ在田ヤシメ我君主ト

陛下ノ間ニ立ツヘキ重任ニ命セラレ且澳地利哄噶利人
民ノ為メ是迄假ニ代理公使ニ任セラレシニ今本官ヲ命セ

ラレシハ余ニ於テ喜悅ニ堪ヘサルナリ我君主ト
陛下トノ間ニ存スル懇親ノ情誼ト今兩國ニテ互ニ確定
セラレシ和親貿易航海ノ条約ニ因リ兩國親昵ノ交誼尚
親密ナラシメテ我政府ニテ期望スル意ト文明ナル貴政
府ノ厚情トニ依リ

陛下及貴國大臣ノ信用ヲ得シメテ期望シ且余ハ兩國
裨益ノ為メ其交誼ヲ益厚カラセムニテ勉テ尽カヌヘ
シ

余カ前ニ謹述セシ主意ヲ果サシニ好機會ト考フル事ア
リ是他ナラスカイレナ府ニ於テ万國物産等ノ展覧會ヲ
開クコト近年ニアレハ貴國ニ於テモ其展覧會ニ加リ玉
クヘキ様貴政府ニ告述スヘキ旨ヲ我政府ヨリ余ニ命ジ
タリ是レ兩國人民ノ裨益ヲ開クヘキ一端ニシテ如是互

ニ兩國人民相接遇スル片ハ自ラ其交誼ヲ増シテ疑
ヲカルヘシ

陛下ニ余カ委任状ヲ謹テ捧呈ス

各國公使賀正恭拝内式

来正月二日第十字内謁見被仰付候旨外務卿ヨリ書翰可
差遣事

但九字迄ニ外務省へ相揃候様可申入事

當日掛リ官負直垂帶劔ノ事

當日途中警衛別手組ノ事

公使外務省へ相揃御所並出門等注進可致事

途中警衛ノ別手組ハ大手御門前下馬礼ノ處ニテ下馬シ
步行ニテ護送可致事

公使中仕切御門内ニテ下車ノ事

公使御車寄ヨリ昇殿ノ事

但此所へ外務大少丞ノ内出迎引テ櫻ノ間へ着ス

外務卿又ハ輔式部寮官負出テ是ニ接ス
賜茶

但大舎人勸之

次ニ事具タル由ヲ式部頭奏聞ス

次ニ大廣間へ出 卿

侍從長出 卿ノ事ヲ式部頭ニ告ク式部頭外務卿ニ告ク

外務卿又ハ輔公使ヲ導キ御席へ進ミ一列ニ立ツ各國書

記官公使ノ後ニ侍立譯官隨從

外務卿又ハ輔各公使ノ名ヲ披露ス

公使順席

伊太里國特派全權公使

コントアレサレドフハ

和蘭國辦理公使

エソペーファンドルフーヘン

澳地利國辦理公使

ヘレソーカリツセ

西班牙國代理公使

ヘブレオロドリゲムノス

英國代理公使

エフオアダムス

佛蘭西國代理公使

コンドデチエレン

伊太利公使各國公使總代トシテ更ニ三步程進ミ賀正シ

言エス

但譯官之ヲ譯ス

有勅語

但譯官之ヲ公使へ譯ス

伊太利公使其席へ退キ外五公使順次ヲ以テ進ミ各點拜
礼シ公使和所へ退ク茶并熨斗昆布等ヲ賜フ
公使退去ノ節如昇殿ノ節

右

千八百七十三年ウニナ大展覽會布告

第一

今般澳地利皇帝陛下非常ノ主張ヲ以テ来一千八百七十
三年ウニナニ於テ萬國展覽會ヲ興行スヘシ是ハ近代
開化ノ形勢ヲ示シ人生經濟ノ全路ヲ開キ尚開化ノ進歩
ヲ増サシメントノ趣意ナリ

此會ハフロートルト称スル帝ノ囑園へ新シニ造営ナス建
家ニ於テ開場スヘシ即来ル一千八百七十三年第五月一
日開場同年第十月三十一日閉場ノ事

第二

次ニ舉ルハ今般ノ展覽會ニ可差出種類分ナリ即二十六
局ニ分ツ

第一	礦山術	製金術
第二	耕作術	園丁術
第三	倉窖術	樹林術
第四	人工ノ食物類	
第五	織機術	衣服
第六	製皮術	ゴム製方
第七	金屬細工	
第八	木林細工	
第九	石器	土器
第十	小道具及ニ玩具物	硝子細工
第十一	紙製造及ニ筆紙類	
第十二	彫刻物	書画
第十三	運轉器械并用法	

第十四	窮理器械外科道具	
第十五	音樂器械	
第十六	軍術	此局ハ軍備及ニ疾病療傷ノ方 法等ヲ包括ス
第十七	海軍	此局ハ海河航ノ事及ニ造船 中ノ用意諸事ヲ包括ス
第十八	器械製造	此局ハ道路鐵道水道水ヲ乾 濕スルノ術水細溝川 堤防ノ築方私宅小戸及ニ公 堂公會戲場病院浴室 洗房等ノ家ノ雜形及ニ其方 法等ヲ示ス
第十九	私住家屋并其造作莊飾	
第二十	借屋并其造作家財諸器	此西局ニ於テハ各國ノ民家 内幕方ノ模倣ヲ示ス

是マテ種々ノ時代ニ製造シタル同種ノ產物ニ夫々高下
シタル代價及ヒ其見本雛形ヲ添ヘテ示ハヘル右ハ種々
ノ戰業進歩ノ実験ヲ經テ変化シ且時勢ノ変遷ニテ國ノ
經濟ニ要用ナル実験ノ繁盛セシヲ示スヘシ是戰業ノ
変遷ヲ示スナリ

第五

今ヨリ前ヲ回顧シテ製造ノ進歩スルニ付學術ノ進歩セ
シヲ示シ是マテ不用ニ屬シタル物ヲ以テ要用物ヲ製
シ退々事物ノ變遷セシヲ示シ且不用物ヨリ製シタル
物品前ノ製造物及ヒ千八百五十一年龍頓ノ第一展覽會
以來ノ發明產物ト比較シテ學術ノ進化ヲ示スヘシ

第六

此會又物價ノ變遷ヲ示スヘシ依テ產物ノ出ル各地方ヨ

リ要用品ノ定價ヲ出スヘシ尤モ可成大以前ヨリノ相場
ヲ示シ五年ノ間ノナラシヲ以テ順序ヲ立テ安排シ且其
物品ノ見本ヲ展開スヘシ

第七

世界通商貿易ニ関スル物產一般ノ變化ヲ示スヘシ是ハ
各國開港場貿易品ノ見本雛形ヲ展開ス

右ノ見本ハ皆夫々其元質主用定價及ヒ輸出入ノ多寡ヲ
記スヘシ且前十年間各港ノ航海貿易詳數表記ヲ示スヘシ

第八

右明細表ノ助ケニ依リ此會カ利益ヲ補フ為メノ趣意ヲ
千八百五十一年龍頓第一展覽會以來各國政府ノ記録ヨ
リ出し戰業ノ進歩ヲ示ス為メ此會ノ諸局ニテ取行フヘ
シ假令ハ土地開拓ノ幅員増加耕作物產年々ノ多寡地面

ノ價直金錢ノ利息銀道ノ上リ方人口等ノ増加ノ諸表記
ヲ千八百五十五年巴里千八百六十二年龍動千八百六十
七年巴里ニ開キタル三ノ博覽會ニ於テ展開セシ如ク示
スヘシ依之此會場ニ於テ夫々局ヲ區分シテ產物ノ生ス
ル國々ヲ示スヘシ

且此ニ示ス諸種ノ物品ノ委敷事即差出シ人ノ姓名其物
品ノ明細書並直段ノ是ハ差出シ人等ヲ其各品ニ札ヲ貼シ
テ示サン

又其他一般ノ利用トナル記録等ヲ持出人ノ願ニヨリ其
物品ノ元質及ヒ進歩シタル經驗并ニ年々ノ出来高等ノ
要件ヲ記載シテ出板セシヲ乞フ時ハ随分其記録ヲ書
記シ或ハ印行シテ其展開スル物品ニ添ヘシ

第九

此會ヲシテ格別世教ニ益アラシメンガ為メ新規ニシテ
是ニテ餘リ人ノ知ラサル品物ノ經驗等ヲ且ニ比較セン
トヲ望ム此會ニ出ス品物ハ必ス其ヲ實地ニ施シ得ヘキ
品數相添ヘ置ヘシ假令ハ葡萄酒產物ニテハ其試驗ヲ為
スヘシ即葡萄ヲ温メ其水汁ヲ絞ル術ヲ施スヘシ越歷ノ
用法ニ関スル各種ノ器械小道具ヲ用ユル試驗空氣學ノ
利益風船等蒸氣舂粉機蒸氣防火機等陸蒸氣機械及ヒ通
例ノ器械ノ試驗ヲ示スヘシ

夫々ノ講堂ニ於テ右等主定ノ講釋ヲ夫々讀聞スヘシ且
萬國物品ノ甲乙附ヲ出スヘシ假令ハ砂糖ヲ製スル蒸菜
ヲ舂粉スル善良ナル器械ノ如キモノナリ

第十

其性質ニヨリ長キ間展開ナラヌ物品ハ此會ノ間一時排

置シテ示スヘシ右ノ物品ハ即生動物ナリ馬牛羊豕犬猫

鳥獸魚類等ナリ

豕禽野獸ノ肉豕脂類

牛乳乾酪等

生菓生菜花植物等

開拓樹藝術ニ害アル植物ナリ

度力ノ試方ハ其動物ノ引カニテナスヘシ又純良ナル馬

ヲ展開スル時ハ一般ノ競馬ヲナスヘシ右競馬ニ於テ景

物ヲ出スヘシ遊戲競艇等ノ種類并勝負事ノ類ハ皆備ヘ

置ヘシ

展開スル所ノ滋養トナル食物ハ眾人之ヲ嘗試シシ為メ

休息所^{即嘗}ヲ興建ツヘシ此所ニ於テハ其物品ノ見本ヲ

賣リ得ヘシ或ハ理シテモ買フヲ得ヘシ

第十一

此會ノ間ハ要用ナル事件ヲ討論スル為メ會議ヲ設クヘ

シ右ハ展覧會工ニテ論スルモアリ又別段ニ大會議ヲ設

ルヲモアリ就中學者術者鑒者精巧術場ノ長及ヒ画工建

築學士器械者商法司ノ目代為督坐及ヒ請負ニ熟シタル

經濟家開拓樹藝礦山司等ノ會合アルヘシ

右會議スヘキ事件ノ内ニハ一般人民風俗ノ開化諸術ノ

進歩擴充器械ノ大ナル助力ニ依テ運輸ノ便利樹藝學ノ

理解市場ノ善法及ヒ新發明ノ料理及ヒ貯藏食物ノ新法

ニ依テ食物ノ價ヲ減スルヲ小兒教育法幼年健康術不見

ノ小兒ノ療治婦人ノ教育及ヒ其礼式等ナリ

第十二

各國ノ使者ニ共フル位地ノ區別ハ地理方ニシタカヒ其

場ヲ分ツヘシ即其國自墾ノ位地ニ基キ西ヨリ東ヘ勉メ
テ其順席ヲ立テ其物産ノ出ル各地方ノ位地ヲ知ラシム
ヘキヲ要ス

第十三

第二章ニ記シタル諸局ヲ區分スルニ付テハ物品差出人
ノ撰ミニ從ヒ其物品ヲ排置センコトヲ望ム局ヲ指示ス
ヲ得ヘシ

第十四

此會ニ於テ一般ノ監察官ハ其物品等賞讃スヘキ權ヲ
命スヘシ物品差出人ハ各其監察ノ裁判ヲ願フカ又ハ願
ハヌカヲ申出スヘシ若シ願ハヌ時ハ其旨ヲ札ニ記シテ
其物品ニ貼置ヘシ
監察官ヨリ与ヘル監定書左ノ如シ

甲 細工物賞標ハ 精細工術ノ賞標ト記スヘシ

乙 展開スル其他ノ物品ハ次ノ賞標ヲ以テス

イ 先年ノ展覧會ニ物品差出シタル人其後其物品
進化セシニハ 開化進歩ノ賞標ト標スヘシ

ロ 今度始メテ展覧會ニ物品差出シタル人ハ其ニ
テ 國家經濟及ヒ工術ヲ示シ大ニ功德アルヲ以
テ 功德ノ賞標ト標スヘシ

ハ 彩色形狀ノ体裁ヲ改良シタル物品ヲ差出スル
ハ 美甜ノ賞標ノ賞標ヲ得ヘシ

ニ 此會モ先年展覧會ノ節ト同様 功德ノ免狀

丙 物品差出人ノ申立ニ從ヒ可賞物品ノ生産ニ付大ニ
助力シタル手傳又ハ職人等ハ 助成ノ賞標ノ賞標ヲ與
フヘシ

丁 人民教育ノ道ヲ抄取ラシ又ハ業術國家ノ經濟及ヒ我
人等ノ便利良法ヲ格別ニ為抄取タル人或ハ會社等ノ功
徳トシテハ別ニ名譽ノ免狀ノ賞標ヲ與フヘシ

第十五

此展覽會取立ノ精細ナル規則並ニ監察官ノ組立及ヒ我
任目錄記細書等一般及ヒ格段ノ法則タルヘシ

千八百七十一年第九月十六日ウヰンナニ於テ

大統領

アルクジューク、レグニール

支配頭

ハロン、デ、スチワルド、センボルン

千八百七十三年維納大展覽會

種類分

○第一場 礦鑛術

イ 山産ノ焚物 石炭、介殼、山産油

ロ 山産礦鑛

ハ 他ノ山産物 山鹽、硫黃、黑鉛等ニシテ第十八場ニ舉

ル建家用ノ物ヲ除ク

ニ 自然ノ混交物

ホ 礦鑛術製金術ニ関スル方法圖即チ穿坑機械用法

測量及ヒ圖引

ヘ 地質術及ヒ地質圖

ト 穿坑製金ニ関スル道具及ヒ發明物

チ 右産物ノ称量

○第二場 耕作術 園術 樹林術

イ 食料及ニ藥材ニナル植物(長久展開ナシ雜キ生菓

生菜ヲ除ク)

ロ 畑作及ニ他ノ麻睡サスル植物

ハ 野菜ノ纖維(木綿、麻、イチビ、亞麻、イヤイナグラス等)

其他製セスシテ貿易ニ用ル植物

ニ 蠶

ホ 製セスシテ取扱フ動物ヨリノ産物(皮革羽毛等)

ヘ 羊毛

ト 樹林ノ産物(材木、指物ニ用ル木材製革物、生樹脂、漆

料木、樹皮、消炭)

チ 泥炭

リ 肥シ

ヌ 耕作術園丁術樹林術ニ用ル方法圖(果園園ノ圖

ル 右実験上ノ書類)

ヲ 右産物ヲ運送貯藏ノ發明方法

ワ 園ノ植木、園丁術ニ用ル道具、室、圃、ニ場、洗滌等ノ方

法并ニ圖

カ 園術ノ新法

コ 右産物ノ称量

○第三場 舎密術

イ 煉藥及ニ合藥術ニ関スル舎密ノ産物(酸塩凡テ舎

密ニテ出来ル藥品)

ロ 煉藥術ノ産物(礦水等)

ハ 脂及ニ其類品(ステロイド、ノ類、脂肪酸、シリシ

油ノ甘燭、蠟燭、小蠟燭等

ニ 蒸露、錐製ノ物、（精製工油、石油、蒸溜ハマ油、ヘニリツ

ノ酸、ベンゾイン、ノ樹脂類エニリン等

ホ 精氣油及ヒ薰物

ヘ スリ附木類

ト 山産及ヒ人エノ漆料

チ 樹脂、洗濯、漆料、晒シ物ニ用エル封蠟、假漆、アルヒユ

ノミン、魚膠、膠糊、デキストリン等

リ 舎密術ノ發明并ニ進歩ノ事

ヌ 其産物ノ称量

○第四場 人エノ食物

イ 粉名物類、麥芽及ヒ其製物

ロ 砂糖及ヒ其製物

ハ 酒精類

ニ 葡萄酒

ホ アール、英國ノ麥酒、ホルトル、（麥酒ノ種）

ヘ 酒酸

ト 漬物、出汁、（肉汁、（カネツル）濃乳汁、エルフスワオルスト、漬

タル野菜、漬肉

チ 烟草及ヒ其種類

リ 砂糖菓子、生姜入ノ菓子、香煎、茹非ノ代リニナル物

等

ヌ 右等物品製造ノ進歩、發明

ル 其産物ノ称量

○第五場 織機、術并ニ布帛

イ 織機ニ用ル晒羊毛及ヒ髮打羊毛及ヒ織細ノ毛絲

羊毛布、毛氈^{ウール}、毛衾^{ウール}、金絲入羅紗、木綿毛絲織文ノ衣服
 木綿、同糸、同織物索繩
 ハ 麻、イチビ、亞麻、及ヒ他ノ織緯糸類、同織物、女服、又屏
 風疊等ノ如キ藁ノ織物、蘆葦、木皮、毛絲ノ綱及ヒ繩
 等
 ニ 生絹絲、製絹絲、及ヒ絹絲ノ製物、同屑
 ホ 金銀入ノ衣服及ヒ縫箔
 ヘ 縫縁
 ト 衣服ノ全備、上着、帽子、女ノ被リ物、沓、長靴、手套等
 チ 家財ノ裝置、壁ニ張ル布、暖簾、寝所ノ道具等
 リ 造リ花及ヒ羽根細工物
 ヌ 石物産ノ進歩發明
 ル 石物品ノ称量

○第六場 革皮 ゴム製造

イ 革、鎧馬具、皮櫃、及ヒ他ノ革ノ製物、衣服及ヒ莊飾ニ
 用ル物ヲ除ク、羔皮紙、及ヒ金箔製ニ用ユル皮
 ロ 皮、及ヒ毛皮
 ハ ゴム及ヒガッタペルカノ物品、宛理、学舎、密術ノ道
 具、及ヒ機械ノ一部ニ用ユル品ヲ除ク
 ニ 石品物製造ニ用ユル發明、開化
 ホ 石品物ノ称量

○第七場 製金術

イ 金銀鍛冶細工及ヒ服飾類
 ロ 鐵器、銅器、機械、建築器、宛理及ヒ樂器ノ道具ヲ除ク
 ハ 他ノ金屬及ヒ交物ヨリ製シタル物
 ニ 銃砲ノ外諸種ノ武器

木 右品物製造ノ發明開化

ハ 右称量

○第八場 木材ノ物品

イ 造作細工(天井窓戸等)

ロ 指物細工

ハ ソキ板細工(桶屋根板飾等)

ニ 片板附木等

ホ 被板及ヒ切込細工

ヘ 木頭及ヒ轆轤細工ノ木

ト 彫物細工

チ 塞子

リ 籠細工

メ 塗木細工、斑点付タル物及ヒ鍍金^{元メ}シタル物

ル 右製造物ノ發明開化

ヲ 其称量

○第九場 石器 土器 硝子器

イ 自然石、細工石、石盤、煉石細工(天工及ヒ人工石、大理

石、敷石、床石、瓦、莊飾物、烟管、砥石等)

ロ 土器(烟管、皿鉢、煖爐、黒坭等)

ハ 硝子細工(家財ニ用ル硝子、偽造宝玉、真珠類)

ニ 右品物製造ノ發明開化

ホ 其称量

○第十場 小道具及ヒ想像物

イ 象牙、鼈甲、真珠、鯨骨ノ製造物、焼器、漆器

ロ 単及ヒ青銅等ノ想像物

ハ 蝙蝠傘、日笠、扇子、杖策等

二 櫛毛拂

ホ 玩具物

ヘ 右品物製造ノ發明開化

ト 其称量

○第十一場 製紙術

イ 紙類及ニ製紙盤

ロ 色紙、紙掛、壁掛、形、骨牌等

ハ 製紙機及ニ車

ニ 書畫入文房道具

ホ 製本機及ニ其類ノ細工

ヘ 右物品製造ノ發明開化

ト 其称量

○第十二場 書画術

イ 書籍印行

ロ 彫板術

ハ 銅板及ニ銅板

ニ 石板術及ニ油画術

ホ 寫像

ヘ 銅板繪、ガイロツクオルク唐草、如キ

ト 画手本莊飾模様画

チ 其小道具及ニ裝置

リ 其称量

○第十三場 機械及ニ運輸元ノマ、ノ次第

イ 大運轉機、蒸氣錐、同機、水車、水準水車、壓機、空氣風及

ロ 越厯等ニテ使用スル機械、煤氣機

運轉機械、車軸、輪滑車、引繩等

ハ 種々要用ノ事業ニ用ユル器械(穿坑製金、金細工、木細工、繰絲、織布、編組裁縫、縫箔、洗濯、掃除、剪切、漆物等)
ニ用ユル機械(製本、製紙、活板製造、印行、石板、色板等)
ニ用ユル機械(砂糖製造、油絞、釀酒、燒酒製造、石鹼、蠟燭、糊、氷、付木等製造、機械、粉名引車、舂粉等諸種、
機械并ニ裝置)

ニ 工ニ記セサル他ノ機械(破裂機、龍吐水、ホレプ、清氣機、
清淨ニスル機等)

ホ 機械ノ元行及ニ其部分
ヘ 鐵道機械(機関車、荷車、乘車、
道仕事場及ニ鐵道發明物ニ用ユル格別ノ機械及
ニ裝置、鐵道建築并ニ其植物ノ次第及ニ雪除ケ
ト 蒸氣度計、量力機、ツラジオ、オートル等

テ 鍊道ニ屬セヌ車駕ノ類不殘
リ 其稱量

○第十四場 究理学及ニ外科術
イ 數學、天文、醫術、舍器術ノ諸器械(尺度、秤量、分析ニ用
ユル器、視學及ニ電信ノ機械)

ロ 外科道具并ニ裝置(假肢、入齒等)
ハ 時辰機、自鳴鐘、袂時計、及ニ其部分(クロノスコープ、
クロノグラフ、
ニ 其稱量

○第十五場 樂器

イ 音樂諸器
ロ 樂器ノ部分(弦弓、
ハ 奏音ノ裝置(遠話管、相圖笛等)

ニ 撞鐘歌

ホ 其称量

○第十六場 軍術

イ 軍勢ノ處置并ニ募集ノ方法

ロ 軍備戎服鎧

ハ 砲術

ニ 兵器

ホ 健身術

ヘ 兵卒教育操練

ト 地圖ヲ作ル術及ヒ歴史ヲ編ム術

○第十七場 航海術

イ 航海術ノ諸品

ロ 湖河航渡ニ用ユル艇舟ノ雛形又ハ圖面海舟沿濱

舟海岸ヲ乗廻ル舟商船軍艦倉船船中ノ用意

ハ 船艦造営ニ用ユル道具及ヒ裝置航行ニ用ユル水

陸ノ仕事造船場港水櫃浮場浮臺場港口防禦等

ノ雛形又ハ圖

ニ 海岸測量術海圖天文測量術水夫士官ノ教法

○第十八場 製鐵術 建築術

イ 建家ノ物品煉化石製造鐵床細工材木ノ取扱人工

石黒泥細工等

ロ 基礎ノ用法柱ネチ柱ユツホルタル木匡橋杭ナ物シ

等

ハ 土工ニ用ユル發明物并ニ道具掘穿機械土泥又ハ

物品ヲ運送シ引奉ケ荷ヲ為メノ器械ノ裝置

ニ 道路鑛道ニ用ユル物品ノ裝置路ヲラシ棒鐵道ノ

二彫刻細工及ニ其小道具

○第二十二場 諸博物館、模様ヲ示ス

イ近世諸種ノ博物館ノ方法(龍頓ノ南ケンシントン
ノ博物館及ニ維納、伯靈、模子港等ノ博物館)

ロ近世ノ博物館ヨリ産シ且擴リタル物品ヲ示ス

○第二十三場 宗教ニ関スル仕事

イ寺院ノ莊飾(壁牆ノ飾、模様硝子、画硝子等)

ロ寺院家財(神机、風琴、說法座、腰掛、神龕、入ノ箱等)

ハ神机、說法座、十字架像、神龕、燭臺、神机掛ケ、毛壇、高座
掛ケ等ノ莊飾

ニ沐浴受戒及ニ葬式ニ用エル物品等

○第二十四場 好事家貯藏人ヨリ差出ル古珍器

イ古代名工ノ画

ロ古銅、瑯器、油画、磁器等

○第二十五場 千八百六十二年第二龍動展覽會

以来ニ出来セシ近時ノ細工物

イ近時建築學ノ方法、雛形測量方

ロ刻像術、圖面及ニ小キ形像トモ

ハ新画法并ニ其画ヲ描キタル陶器等トモ

ニ刻画術、銅鋼ノ彫刻腐蝕等

○第二十六場 教法 教育

イ養育、小兒ヲ育テ馴ケ教ユルニ善良ナル所為、養明
及ニ其出生ヨリ學校へ入ルマテノ理學、性理學ノ
教ヘ其養育、子兒ヲ養ハル等、同遊園、遊獵、遊戲及
ニ其健康術

ロ教育、學校并ニ雛形圖面ニ於テ學校ノ裝置及ニ教

法、旨意ヲ示ス教育ノ書物并ニ記録、学校ノ書記
及ニ其法則

甲 小学校 此局ニ盲、聾、啞、愚ノ教育ヲ包括ス

乙 中学校 是ハ近用ノ學文及ニ近世ノ語學教

育ヲ包括ス

丙 術學叢

丁 總大學校

ハ 一技術ノ教法、大人ノ教育、木板書庫、學校會社

都テ機械ハ第十三場ニ排列スヘシ然レ物品ノ格別
ナル種類ヲ製造スルタメノ器械ハ其器械ノ屬スル
場ノ監察其器師ノ補助ヲ以テ之ヲ吟味監定ス又其
處々其物品ヲ排置セント願フ場處ヲ撰ムハ差出シ
人ノ勝手タルヘシ但一場ニ限ラス其物品差出スト

モ不苦事

増加展開

一 發明物ノ記録

二 職業ノ記録

三 クレモナノ樂器

四 不用物ヲ取テ有用物トナスノ并ニ其物品

五 物價ノ記録

六 世界貿易ノ説明

一時ノ展開

一 生動物(馬、牛、羊、豚、犬、鳥、魚等)

二 屠肉、野獸ノ肉、家禽、油脂等

三 乳汁類

四 園圃產物(生菓、生菜、花、植物等)

五 開拓樹藝ニ害アル生杵木

右展覧物ニ付格別ナル規則等ハ此後出板スヘシ

千八百七十一年第九月十六日維納

大統領

アルクジューク、レグニール

支配頭

バロンスチワルドセンホルン

元和歌山藩雇入字國教師破約ノ始末大意

元和歌山藩ヨリ同藩雇入字國人ケツヒレト申者ヘ字國
ヨリ兵學教師数名雇方相托シ並ニ旧藩知事ヨリ当時ベ
ルリン在住公使ブランバヘモ其段頼遣シ候ニ付字政府
ニテ人撰乃チ大砲士官一人歩兵士官一人土工兵士官一
人騎兵士官一人陸軍醫師一人旧冬横濱ヘ到着致候處已
ニ廢藩置縣ニ付金川縣令陸奥氏并ニ元和歌山同藩大属
津田正常等ヨリ破談ノ儀申談候處右ハ字政府ヨリ態ト
人撰差越候程ノ儀ニ付通常償金ノ談ニ可涉ニアラス交
際上ノ目的ヲ以テ本人願ト身分ニ不背政府ノ恥ニモ不
相成様漸置致吳度旨十二月廿二日廿五日兩度代公使ヨ
リ副島卿ヘ申立候ニ付是マテ我兵式藩々區々ニ有之處

府藩縣更ニ一變ノ兵式取設候譯ニ付他兵式相用候儀差
支ヘ候事ニ付破約ハ実ニ不得已ニ出候儀故決シテ貴國
ヲ恥シノ候様ノ儀ニテハ無之旨等種々懇々説諭相成候
未詰リ表向書翰被差出候テ亦曲回答ニ可尽旨申聞乃チ
十二月廿七日右書翰差出し返翰取調中和歌山縣ヨリ已
ニ金川表ニテ本人ヘ直談ヲ遂ケ一年ノ給料并ニ船賃等
相渡ニ破約ノ儀調談相成候趣届出公使ニ事實ノ右様相
運居候ヲ承知書面差出候儀不都合ニ付書翰返却致美候
様正月二日卿御面晤ノ節申出候ニ付同四日右書翰ケレ
フルマレ迄差戻候處尚少シク異論有之趣ニテ又ニ書翰
返却相頼候事又ハ別ニ此答翰ヲ頼ニ可申乎兩条ノ内追
テ可申出答ニ相成其終ニ相成候事

正月十日認

以手紙致啟工候然ハ横濱貴國領事館家租千八百六十五
年第十一月十一日ヨリ七十一年第十一月十一日迄六十
年分總括五千百ハルヲ並ニ貴國商人地稅千八百六十
六年ヨリ七十年迄總括五千四百〇六ハルヲ四十九ト
ント収納滞リ候ニ付神奈川縣ヨリ屢催促及テ候處貴國
人ヨリ訴訟ノ件々不相濟候ニ付納メサルトノ趣ニテ示
談不行届無餘義本省ヘ申越沢前外務卿等ヨリホンブラ
ド氏ヘ及御談判候處前同様ノ趣意被申張同氏歸國ノ際
ニ臨ミ右地租五千四百六枚餘ノ内訴訟ノ事兩國政府同
意決定ノ後迄二千枚ヲ滞置候テ殘三千四百枚餘ハ御渡
可被成旨書翰ヲ以テ被申越右ハ不相当ノ筋ニ候ヘテ假
ニ其意ニ應ヒ其旨神奈川縣ヘ申達同縣ヨリ請取ノ為メ

官負責館へ差出候處、ホンブラント氏出立前ニテ繁雜ニ付
出帆後、ケンブルマン氏ヨリ可受取番細同氏へ後事ヲ被
托置候旨被申間、且宮本外務少丞ヨリ我客歲四月七日附
書翰ヲ以テ、ケンブルマン氏へ宛神奈川縣廳へ御渡シ可有
之旨申入同縣廳ヨリ我受取ノ者差出候處、無余義事情有
之難被渡委曲、ホンブラント氏へ申送候ニ付、差圖次第可
相渡トノ趣ニテ其後モ度々催促候へ氏無其詮、其後領事
カッペー氏ヨリ千八百七十一年第九月六日付書翰ヲ以
テ同七十年末迄ノ地租ハ領事館ニ被集置候旨神奈川縣
知事宛來示有之同知事ヨリ回答旁受取方掛合候處
是ハ、ホンブラント氏ヨリ差圖無之内ハ難渡旨被答尚又同
縣令ヨリ我昨年十二月廿日附書翰ヲ以テ、ケンブルマン氏
へ掛合且面談ニモ及ビ候處、今ハ同氏取扱ニ難相成旨被

答候由同縣令ヨリ申立候右ハ前顯ノ如ク、ホンブラント
氏ヨリ可被相渡旨ノ來示モ有之候工ハ今更差圖ヲ相待
候ニハ及間敷或ハ訴訟ノ未濟ニ托シ或ハ、ホンブラント
氏遺命ト唱へ或ハ無余義事故アリト稱シ種々ノ辞柄ヲ
構へテ遷延年ヲ累ネルハ、我政府ヲ玩弄被致候様ニ相見
候然ルニ昨年沢前外務卿ヨリ二千弗ヲ訴訟相濟候迄預
置候儀交際工ニ於テ有間敷候儀ニハ候へ氏格別懇信ノ
取計及ビ候處御渡可相成分迄モ其後御渡無之工ハ最初
預置ト約セシ二千弗御渡可被成不惣ハ無余義貴國政府
へ直ニ御掛合可及、存候然ルニ已ニ商人等ヨリハ取集
相成居候趣ニ候間右掛合渡シノ儀御取計可有之我此段
御掛合可及候間否御回答可有之候右可得御意如此御座
候以上

卿 輔

獨乙代任公使

閣下

以手紙致啟工候懸ハ各開港場ニ於テ輸出輸入其他税金
拂方ニ付我新貨幣一分銀二分金、キレコ銀取立候割合
ノ儀既ニ委細及御達御承知ノ通ニ有之候處一朱銀二朱
金兩種ヲ以テ納税ニ指出候者有之收納致来候ハ元来
右ハ小數取引便利ノタメ通用為致置候儀ニ付一兩以下
端數ノ外租税ニ收納不致苦相決候ニ付東京横濱ハ来ル
我三月朔日ヨリ以後外開港場ハ右承知ノ日ヨリ三十日
ノ後ハ右ノ通取行ヒ一兩以下端數ノ分ノミ受取可申其
割合ハ従前ノ通り一分銀一箇ニ付二朱金二箇及ヒ一朱
銀四箇ニ等シク候間此段貴國人民ハ御布達有之候様致
度候尤兵庫大坂長崎ハ来ル二月六日横濱出帆ノ米國
郵船ヨリ相達ニ箱館ハ、此次ノ米國郵船ヨリ相達ニ新

鴻へハ来ル二月七日ヨリ陸便ヲ以テ遠置候間右各國在
田ノ貴國人民ハモ同時ニ御布達有之様致度候此段可得
御意如此御座候以上

壬申正月廿九日

卿 輔 西 名

各 國 公 使

閣 下

郷 村

正 副 戸 長

下掃除ノ者迄白昼人跡ノ繋キ路工ヲ蓋モ無之糞桶ヲ
以テ搬運致シ候ハ一般ノ儀ニテ諸人相怪ミ不申候ヘト
モ其實ハ甚タ不潔ノ事ニ有之就中府下ノ儀ハ皇居ノ
在ル所ナレハ百事ノ風習自カラ四方ニ關係致候儀ニ付
右様不潔ノ風習相改可申事、候依テハ自今屹度糞桶ノ
蓋ヲ製シ臭氣ノ不洩様ニ心ヲ付ケテ密閉スヘシ万一違
背致無蓋ノ糞桶ヲ用ユルモノ有之ニ於テハ取締組見付
次第差押ヘ可申筈ニ候条此旨兼テ相心得候様下掃除渡
世ノ者ハ不洩様懇々可申諭候事

壬申正月廿七日

東 京 府

外國人入京規則

一 京都ニ於テ博覽會開場ノ日ハ來三月十日ヲ以テ初ト
シ此日ヨリ五十日ノ間外國人入京縱覽ヲ許スヘシ但
入京ヲ願フモノハ左ノ規則ニ從フヘシ

一 大坂兵庫兩所ニ於テ其自國ノ領事ハ此入京切手ヲ渡
スヘシ領事ヨリ之レニ其國名人名番号ヲ記載シ其印
ヲ押スヘシ但シ入京ノ間所々ニテ右切手ノ檢查スヘ
キアラハ之ヲ示スヘシ其檢查ヲ拒ムモノ或ハ其切
手所持セザルモノハ通行ヲ免サス

一 滯京中遊歩スルハ京都府管轄外ニ出ルヲ許サス府内
ハ勿論入京ノ途中遊獵發炮ハ一切之ヲ禁ス及ヒ都
諸人ノ立入ルヲ許サハ場所ハ入ルヘカラス

但し江州琵琶湖ハ京都府管轄外トイヘ氏遊覽ハル
ヲ許スヘシ尤其期程ハ東ハ彦根南ハ草津駅北ハ堅
田迄ヲ限リトスヘシ
一會場ハ所持ノ品差出シ度モノハ前以テ自國領事ノ手
ヲ經テ大坂兵庫ノ内官廳ヘ申出其差圖ヲ受ケヘシ尤
品物差出スモノハ開場一週日前ヨリ入京シ開場後一
週日滯京ヲ許スヘシ
壬申二月

濱田縣廳地震ニテ疊潰シ候ニ付先御届

今六日夕第五字ヨリ大地震ニテ縣廳并官宅及濱田市
中人家大凡疊潰直ニ所々ヨリ出火即今消防ノ手段無之
此勢ニ候ハ如何程延燒致シ候モ難計勿論壓死怪我
人等夥數可有ト相見ヘ且在々ノ儀ハ消息相分不申候
ハ氏何様古来未曾有ノ凶変ニ付不取敢為御届判任出仕
平野忠守差出候間委詳御聞取被下度餘ハ追々御届可申
工候也

壬申二月六日

濱

田

縣

大

藏

省

御中

本月六日第四字頃地震同日第五字頃甚敷地震
ニテ縣廳官宅及濱田市中人家壓潰シ候ニ付
件々左ニ申上候事

一縣廳官宅大凡相潰候事

一榎産調所皆焼ノ事

一濱田市中軒數千百位ノ内凡ハ分方相潰シ直ニ處々ヨ
リ出火ニ付消防ノ手ヲ尽シ候ヘ尺火勢益々相募リ此
餘何程延焼モ難計御座候處即刻出立仕候ニ付其後如
何相成候哉ト懸念仕居候事

一縣廳官宅破潰ニ付テハ差当リ官負兩人生死未相分候
其外怪我人有之哉モ相知レ不申候事

一市中潰焼候ニ付テハ死人怪我人多ク有之趣ニ御座候處

委敷儀未相分候事

一出火ニ付差當リ租税金一万五千兩焼失致候様御座
假事

一生産取扱諸品皆焼致候様御座候事

一人家潰焼ニ付テハ目下人民飢渴ニ及テ候ニ付專断ノ
儀ニハ御座候ヘ尺差當リ取救不致候テハ不相叶儀ニ
付救助飯焚出シ候事

一縣廳官宅并ニ市中人家潰ニ付住所無之候分ハ專断ノ
儀ニハ御座候ヘ尺差當リ居所無之テハ不相叶儀ニ付
假家可相建手筈ニ御座候事

一濱田近辺往還其他土地二尺位分割直ニ濁水涌出於山
崩レ岩石轉シ落田畑破損所多分有之容易ニ起返リ難
相成候様御座候事

一為御届当所へ罷登候ニ付往來筋廣島縣境市木村ト申
所マテ破損取大略見聞仕候處濱田ヨリ遠ク相隔候程
地震手輕ク御座候ニ付死人怪我人人家田畑破損等モ
手輕ク御座候尤租税米積置候郷藏何レモ相潰レ候テ
其餘郷村ノ儀ハ消息未相分候事

一縣廳官宅其他假家取建人民救助等尺差當リ難捨置度
件モ可有之候ニ付テハ多分ノ御入費相掛リ可申候様
御座候事

一田畑破損所有之候ニ付當年植付無覺束場所多分可有
之様御座候事

一出立ノ節地震未止於古來未曾有ノ引沙ニ付テハ津浪
差起リ候モ難計模様ニ御座候事

右ハ地震焼失未相止混雜ノ央不取敢翌七日未明出立仕

候ニ付委敷儀ハ相分ラス候ヘ氏大略申上候程追テ明細
取調本廳ヨリ御届可仕候以上

壬申二月

濱田縣出仕平野忠守

以書翰啟上仕候然ハ先般字佛戰中局外中立事件ニ付獨
乙代理公使「フオン」トヨリ苦情申出候始末ニ付政
府、御趣意貫徹候様獨乙國外務執政ヘ辨解可致旨被仰
越候處右事件ハ最早程去候事ニ有之殊ニ「フオン」ラン
ト儀ハ疾「ベレ」ン府ニ到着致居今更突然公ニ彼外務執
政ヘ辨解候テハ却テ事ハ今敷相成可申存且歐洲ニ於テ
右様差違候事件ハ内談ニ致候事モ往々有之幸當時当巴
里府在留獨乙特派全權公使「ア」ニ「ト」中者兼テ懇意ニ
付同人ハ最初中立御布告ノ手續ヨリ「フオン」ラント苦
情申出候始末ヲ逐一申述我政府於テハ聊偏頗ノ處置不
致旨等爲、及辨解右情實被政府ヘ通シ吳候様相頼候処
同人ヨリ早速申遣シ其後別紙寫ノ通書翰差遣シ候間石

ニテ御領承被下度候尤右書翰ノミニテハ結末不相付様
ニセ相見ハ候ハ氏獨乙政府ニ於テハ昨年戦争以來歐洲
中立諸國トモ多ク同様ノ事件ニ議論ヲ生シ候末ニテ又
々右様ノ議論相生シ候ハ甚不好事ニハ候ハ天公然辨論
ニ及候氏ハ彼ニ於テモ外各國ハ對シ普通ノ公法ニ基キ
是非曲直不相糺候テハ其國体ニモ關係致候情實モ有之
此事件ハ再論不致為相降度内情ニ付右様申來即此書翰
ニテ事實ニ於テハ落着相成候事故左様御了解有之度奉
存候向後右様當洲ニテ御談判相成候事件ハ機會ヲ不失
様速ニ御報知被下度候

別紙白耳義領事ヨリ横文書翰一封差出蒙領事持参イタ
シ候ニ付宮本少丞面會イタシ候處副島公御任官ノ祝詞
申上度即書翰ノ儀モ有之儀ニ付兼テ御吹聴ノ由答ノ旨
ニ有之右ニ付横濱御出張ノ旨申間候處左候ハ同所於
テ御面會及レ候様ニモ可相成旨ニ付御會迄別紙相添此
段申上置候也

辛未十一月十日

外務省

副島公

寺島公

閣下

尚以テ本文領事ヨリ今一事申立右ハ同人事近々歸國
可致ニ付ムロロ申者代任ニ致シ東京横濱兩所領

事ノ事務爲取扱可申旨ニテ即別紙ノ通書翰差出込翰
ハ是ニ別紙ノ通取調差上候ヘテ一体右領事儀ニ横濱
表於テノ折合不宜哉ノ風聞モ無テ相聞候處其者ノ人
選ニテハムロニ事代任ノ儀許否如何可有之哉幸ニ
御出張ノ儀故尙風聞等御紀ニ御坐候上可然候ハ、又
翰達ニ方御命可被下候也

甲号

翻譯文

以手紙致啟工倭然ハ去ル已年箱館現在有權ノ長吏へ用
立候石炭代金ノ苦情我英商人ハ一エル氏ヨリ申出候ニ
付去ル貴國七月三日拙者ヨリ差進ニ候書翰ノ回答ハ
貴國九月八日其時ノ外務卿輔ヨリノ書翰致落手候扱
右ノ儀ニ付取初沢宣嘉閣下ヨリ被差越候書翰彼是可
難文意有之候ニ付無扱返壁致候処右九月八日ノ貴翰沢
閣下ノ書翰略疎漏無之候ハ凡萬國交際ニ用ニ候普通ノ
礼儀十分相整不申段残念ニ有之拙者ニ於テ深ク怨ニ候
故未タ回答不致前其節ノ外務卿若倉具視閣下へ致持参
置存ノ処ヲ指示ニ可
難文意并御議論致齟齬候故再考
置候様頼置候處於閣下ハ当方ノ致方全貴政府へ對シ

親意ノ証據ト察シ厚ク謝詞ヲ述ラレ於此事件取調追テ
相談ニ可被及御約束ノ處其後特ニ大使ノ任ヲ受御繁多
ノ様子ニテ拙者ヨリ再三御催促ニ及ビ候ヘテ御出帆前
約束履行ノ御都合無之儀ニ立至リ申候右ニ付無據閣下
ハ申入レサルヲ得ス元來前書九月八日貴翰ノ文意於拙
者許容難致儀御断申其工御議論中蹤跡無之御議論一兩
廣可申述扱去ル辰年十一月九日東久世ヨリ各國公使ハ
被指越候別紙書翰寫御覽被成候ハ其趣ニハ箱館知府
事以下ノ官負無余義奥州青森へ退去被致右ニ付箱館恢
復致候迄外國商船渡海見合候様被致度趣ニ有之遂ニ復
本全次郎附屬ノ反逆人同港ニ據リ現在有權ノ政府ヲ建
置候右東久世書翰ノ回答トシテセルハルリハハハ
各國同僚ハ申合同月十七日別紙書翰寫ニテ雖恐各國

公使會議致候處元來外國人民同港ニ居田シ商賣ヲ遂ケ
候道理有之候間右事件ノ為メ此道理ナクナリ候譯無之
ト存候御氣ノ毒ナカラ閣下ノ求メニ難應尤貴國內輪ノ
事件ニ付英國人民立合不致様兼テ同閣下へ委細申聞置
候通リ英國船ニテ兵卒或ハ戰國禁制ノ品運送差止候様
手当致置候趣ノ處前書九月八日ノ貴翰如來論運用諸品
則戰時禁品ハ決シテ賊徒ハ不賣渡様處置可有之約束固
ヨリ無之賣渡ト申文字ハ無之只軍用禁制ノ品運送トノ
有之右石炭ハ既ニ箱館ニ入港罷在已年正月廿二日貴
政府公ノ布告ヲ以テ各國人退去致サセ右石炭渡候節ハ
ハハエ氏田守ニテ現在有權長吏ノ官負其住宅へ罷越
其處居合候貴國番頭ハ掛合石炭可渡様取上候程ノ掛合
ニ被及候故貴國ノ番頭固ヨリ無詮其石炭被拿候儀ハ有

之石：因テハ、エル氏手ツカラ石炭ヲ賣渡候事ニハ無
之擅横ノ所置固ヨリ無之英國公使布告ノ旨ニ違ヒ候義
無之候ヘハ固ヨリ所分可致譯無之然ルニ前書ノ末文致
點曉候處貴國內乱ノタメ外國人損害ヲ受候節貴政府ヨ
リ可償道理有之哉被成御承知候ヘハ、エル儀自分ノ
所為ヲ以テ損害ヲ求メ候者ト御勘考有之様ニ相見ヘ申
候左候テハ、エル氏右損害自分ヨリ求候義無之時ハ
貴政府ヨリ早速可償御存意ニ可有之尤前書續々申述候
通り元ヨリハ、エル氏自分ヨリ求メ候義ニ無之候間於
再應右石炭ノ義ニ付ハ、エル氏ノ苦情責政府ヨリ慰シ
候様頼入候右ノ趣可得御意如此御座候以上

英國代理公使

十一月廿三日

エフ オアグムス

副島 外務卿

寺島 外務大輔

閣下

寫

以手紙致啟工候狀ハ先達テ及御達置候脱艦頃日箱館へ
龍米候處防禦ノ兵不足ニテ知府事以下一往奥州青森へ
引上候ニ付同所ニハ政府ノ官吏無之不都合ニ付追テ同
港恢復迄ノ間貴國商船不差越候様イタシ致度存候石ノ
趣可得御意如此御座候以上

辰十一月九日

東久世中將

英吉利公使

シルハルリーパークスケシテ

閣下

貴國十一月九日付ノ書翰致被見候然ハ箱館ノ儀徳川氏
脱走家来押領折柄各國商船渡海ノ義可見合様御申越候
ヘ此佛蘭伊亭米各國同列ノ會議イタニ候處元來各國人
民同港ニテ居留シ商賣ヲ遂候道理有之候間假令右様ノ
事態差起候トモ之カ為メ右ノ理ヲナリ候譯無之ト存
候間乍御氣ノ毒閣下ノ求ニ難應尤貴國內輪ノ事件ニ付
英國人民立合不致様無テ閣下ヘ委細御咄申候通り同港
迄英船ニテ兵卒或ハ戰國禁制ノ品物運送差由候様豫メ
致手當置候此段御報迄得御意候以工

十一月十七日

ハリエスハルケス

東久世中將

閣下

乙号

我十一月廿三日付ノ御書翰落手然ハ魚テ書翰ノ往復ニ
涉リ候箱館表ニ於テ貴國商人ハウエル氏ヨリ當時同取
ニ在ル賊徒ニ石炭賣渡候儀ニ付於又續々御辨論ノ趣致
承知候石炭ハハウエル氏不在中ト申ナカラ同氏召
仕ノ者ヨリ賊徒ニ賣渡候旨最前我五月廿五日附并七月
三日付ノ御書翰ニ御申越ニ付元來我政府ニ抗抵致候賊
徒ノ負債ヲ政府ニ於テ之ヲ引受候儀ハ御請求ニ難應旨
九月八日付ノ返翰ヲ以テ委曲及回答候處石書中ニ相違
ノ原モ有之候趣ニテ御返却有之何等ノ廢ニ候哉詳ナラ
サル中尚又今般御申越ノ趣ニテハ石炭賊徒ノ手ニ渡
リ候ハ畢竟賊徒共暴威ヲ以テ掠奪可致勢ニ付無余義相

渡假義ニテ、ハウエル氏好テ之ヲ賣渡假事ニハ無之旨御
来示ニヨリ右ノ廬前後御書送ノ處其情実委細始テ了解
致候右九月八日付書翰ノ趣回答致候譯ハ今般閣下ノ御
来書本文ニモ御陳述ノ如ク到底戦時用品タルハ否ムヘ
カラサルノ品ニ付若シ得心ノ賣買ニ候テ社中ノ訴不奈
理ノモノト御勘考可有之ト存候ヨリノ義ニ有之候扱カ
アハルリパークス閣下ニハ箱館賊ヲ以テ交战ノ權ヲ持
セル者ト認メラレス閣下ノ御書中ニモ其戦權ヲ持スト
イヘルハ替唱ナリト御申越有之候ハ最其理有之事ニテ
極テ御同意ニ候然ルニ交战ノ權ヲ持セスシテ兵刃ヲ執
レル後黨ノ者ハ海陸何レニ在テモ賊名ヲ免レス是等ト
關係セルヨリ生スル損害ヲ其政府ニ要ムルノ理決シテ
無之右ノ流氓黨ヲ結ビ羣ヲ成シ自己ノ勢力ニヨリ凌暴

ヲ為シ一ノ要地ニ據リ暫長吏ノ權ヲ行フニ於テハ其權
ノ行ハルハ即政府ノ權ノ不及所ニテ其責任モ又政府
ニ歸スヘカラサル者ニ有之如何トナレハ政府ハ只其指
揮ノ下ニアル者又ハ其許シタル事ノ為ニノミ其責ニ可
任事ニ候去ル迄當時箱館ノ反賊ヲ馳逐シ之ヲシテ帰順
セシムルニ付政府ノ用意等閑ナリトハ存不申即閣下
御書中我政府ヨリ布告セシ貴國千八百六十九年第三月
四日ノ儆戒ニ基キハウエル氏箱館府ヲ立退キ不在中石
炭ヲ取押ヘラレタリト御申越相成然ルニ是ヨリ以前箱
館居住ノ貴國人危難ニ罹ラサル様貴國ノ軍艦ヲ同所ニ
送ラレ候ヘトモ我政府ヨリモ六十八年第十一月各國
人ノ家眷所持物ヲ平穩ノ地ニ移サン為ニ一艘ノ船ヲ箱
館ニ差向假事ニ有之サレハハウエル氏社中所持ノ品既

一月前ニ青森ニ積送ルノ用意アルヘキ筈ニ候ハハ假令積送り得サルトモ幾何敷防禦ノ術ヲ尽スルヲ得ヘキ筈ニ有之然レハ石炭ノ損失ハ其誤ニ非サレハ必其不幸ニ属シ可申決シテ我政府ノ誤ニハ無之候石ハ別紙伊太利國、レツグホルン府内乱一件ニ付澳地利國ノ外務執政アリシ、バリレンススワルツェンヘンゴヨリ貴國在留ノ同國公使ヲ以テ貴國ノ外務執政ニ示セシ書翰ノ拔萃并同事件ニ付魯西亞外務執政ネサルロイド氏ヨリ貴國ノ外務執政、ロルドバームストン氏ヘ送りシ書翰ノ拔萃ヲモ差進候間右ニテモ御了解可有之儀ト存候前件拙者共勘考致候處政府ニ於テハ其職掌ヲ尽セシノミナラハ外國人ノ為ニ其望トヘキ条理ニ過クハ用心ヲ尽セシト存候并ニ其立去リシ跡ニ残セル所持物ノ為ニ我政府

責ヲ受ヘシト御申越有之候義御同意難致候於又貴國政府ノ御公論致承知度存候此段回答如此御座候以上

辛未十二月五日

卿

輔

西名

英國代理公使

ア

ダ

タ

ス

閣下

別紙横文一枚相添

以手紙致啟上候然ハ米穀輸出制禁之儀ハ迄來之通其儘
差置候テ此後國內有餘有之節ハ時宜ニ因リ大藏省貯藏
之内諸開港場ニ於テ海外輸出之為公之入札ヲ以テ中外
人民ニ賣渡可申右入札之日限ハ其節各港ニ於テ布告可
及候將又米穀之儀ハ時トレテ政府ニテ輸出候儀モ可有
之此旨貴國民ハ御布告有之度存候右可得御意如此御座
候以上

辛未十一月廿八日達ス

卿

輔

各國公使

閣下

米書翻譯文寫

貴國九月廿九日神戸表外國人借持候山手地稅ニ付閣下
同列一同ヨリ被指越候書翰致落手候如米諭往來御談判
相重リ候處今以相纏リ不申趣致承知候元米京都表

天皇陛下之大臣佛蘭英三國公使評決致候趣外國人借受
候上貴國前持之者同様年貢村八費可納然レ處右年貢入
費之儀ハ區々之境界持主之名前年貢入費巨細記候名主
之帳面ニテ直ニ相分リ可申只貴國前持之者名前削去リ
外國買主之名前ヲ書入候外ニ改候儀ヲ要不申村入費之
儀ハ年々増減有之由ニ付右平均トレテ一及ニ付年一兩
納候様致度趣當方ヨリ及御掛合候處其節同縣ノ長吏ニ於
テ承諾之趣致傳承候然レニ至今日テモ未タ相纏リ不

申所以ト申ハ未タ村帳面不被為差出候ニ付可納年貢之
高相分リ不申乍併貴國之税法如何様御改正有之候トモ改
正以前買取候約束ニテ一向關係無之儀閣下モ御承知可
有之事必然ト存候間神戸税法改正之上ハ我國人ニ係リ
候地所トテモ從來之税法其儘居置候譯ニハ至リ兼候旨
被申越御同論難申將又同所山手之地所我國人ハ賣渡候
儀禁制相成候趣致傳承候右ハ貴政府ニ於テ兼テ賣買可
差許御約束擅ニ違背ノ儀ニ當リ候間其禁ヲ廢止被致度
存候右之趣可得御意如此御座候以上

十一月七日

英國代理公使

エフオアダムス

寺島外務大輔

閣下

同 返書

本月七日附ノ貴翰落手然レハ神戸表地税等改正ヲ可加
ニ付及御打合置候處御異見ノ趣縷々御来示致承知候同
所中外人民雜居ノ儀ハ元來我國人民所屬ノ地所ヲ外國
人ハ示談ニテ一時賣渡候儀ニテ既ニ地税其他諸入費其
被我之差別無之就テハ今般税法等改正致候ハ獨外國人
ニ係リ候譯ニ無之中外一樣之法則ヲ取設候積リニ付其
段御了解有之度候此段回答如此御坐候以上

辛未十一月廿九日

寺島外務大輔

副島外務卿

英國公使

エフオアダムス

閣下

翻譯文

貴國十一月廿八日之貴翰致落午候然ハ米穀之儀貴國內
入用有餘之豐歲之節ハ公藏貯藏之内開港場ニ於テ海外
為輸出入札ヲ以賣渡又時トシテ貴政府之為メ輸出被致
候儀モ可有之趣致承知候然ル處貴國ト各國ト取結候條
約中米穀輸出禁制之箇條日本國民糧食不缺様防禦之為
メ掲載有之候様被思候ヘモ右制禁七八分又ハ十分欲廢
時ハ調印之双方豫メ許可セサルヲ不得尤右制禁全廢候
時ハ農民其有餘之米相當之直段ニテ賣捌輸出税ト出入
船手敷料ヲ以國財ヲ相殖シ且廣ク貿易商法盛大ノ一端
ニテ大ナル有益之事ニ候間各國ニ於テ異存申聞敷害ニ
候處只某之社中又ハ某之國ニ株ヲ許シ候目論見ニ有之

候時ハ今般貴政府ニ於テ御相談之所為其他之外國ニテ
固ヨリ不承知可申事ニ有之然ルニ果シテ斯様之儀ニ相
當リ候趣致傳承候則近頃香港ヨリ之便ニテ同所ニ於テ
神戸ヨリ千二百萬斤入港待居候由右ハ貴政府之許可無
之候テハ固ヨリ輸出不能儀ニ有之且横濱在留米國某商
社去貴國九月頃同所貴國米屋ト相談ヲ遂南支那ハ輸出
差送候為米千萬斤買取之致約束未輸出之免許不授候處
此度貴政府ニ於テ負債之責ヲ引受同社中之為メ借主ニ
相成候ニ付右負債之拂方米穀ヲ以被致其輸出免許狀ヲ
以猶前書千万斤打込輸出被許候趣且前書社中横濱并神
戸ヨリ南支那ハ重荷積送り候タメ近來蒸氣船航前般數
般相雇米積出候目論見ニ非レハ右様餘計之送運ハ不用
之者ニ有之遂ニ前書取沙汰相違無之事判然ト存候所前

ニ如陳述候ハ、條約中一個國之人民ニ許シ候免許他之
國モ同様可許箇條ニ致違背候而已ナラス貴政府ニ於テ
自己之損益并民家之損益見違候儀ニ有之事ト存候右ニ
付前書申述候蒙全制禁ヲ廢シ貴國之米價ヲシテ外國人
ハ勝手次第賣渡候儀許シ候ハ最上之處置ニ有之左候
時ハ萬一後日ニ至リ凶年有之時ハ早速外國之交易ヲ以
不足ヲ可補事疑惑被成間敷候若右之處置不肯自己有餘
之貯藏ニ限ラント欲スル時ハ入札又ハ公之糶賣ニテ賣
拂ニ可限左候テハ海外互市場賣拂之為メ差送り用違等
ニ口錢ヲ不被取尤高價ニテ賣拂候事ヲ可得右之事件兩
國交際上緊要之事ニ付本書之寫後使本國政府熟攷之為
メ相廻シ可申候間早々御回答待入申候右之趣可得御意
如此御坐候以上

英國代理公使

十二月晦日

エフ、ホ、アダムス

副島外務卿

寺島外務大輔

閣下

萬國新聞第五号米國サンフランシスコ新聞抄譯中同國
米商ウエンリートノ米會所ヲ差心且他ノ外國人米會所
五ヶ所并日本人ノ米會所二十ヶ所ハ政府ノ許可ヲ得テ
其業ヲ營スル等云々掲載有之候ヘ其其實ハ昨年来同國
領事ヘモ注渡ヲ重テ候儀ニテ全ク我國商人共多人數打
寄空米ノ相場ヲ立其直段ノ高低ヲ以テ勝負ヲ争ヒ候ハ
其所為賭事ニ同シク從來我國ノ禁條故違犯不致様我國
ノ商人限リ申渡候儀ニテ決シテ外國人ノ商法ヲ差拒候
譯ニ無之處彼國ニ於テ右様掲載候ハ事實誤傳ニ出テ極
テ不都合ノ次第ニ候然ル處今般特命全權大使各國ヘ被
差遣候ニ付テハ外國新聞等訛傳之筋ハ其始末之點略述
ニ可申立旨御達ノ趣モ有之ニ付不取敢此段申上置候可

然御所分有御座度候也

辛未十二月十三日

東

京

府

正院

御中

米穀入札賣渡規則

一 米穀輸出制禁之儀ハ迄米之通ニ有之然レトモ此後國
内有餘有之節ハ時宜ニ曰リ大藏省貯藏之内都合見計
ヒ諸開港場ニ於テ海外輸出之為メ公ニ入札ヲ以テ内
外人民ヘ賣渡可申事

一 拂渡之日限并賣渡スヘキ石島ハ入札日限前ニ米穀ヲ
賣リ渡セル地之運上所前ニ張出シ置可申事

一 入札望之者ハ入札日限前日迄ニ運上所ヘ申出候ハ、
在米一覽可為致事

一 入札ハ開札當日十二時迄ニ其運上所ヘ可差出事

一 入札ニハ米穀一百斤ニ付金貨何程ト可記載事

但銀圓又ハ洋銀トモ其時之相場ニ從ヒ受取可申事

一開札ハ當日午後第二時諸入札人之目前ニ於テ公ニ披封致ヘキ事

一開札之上具落札之價適當ナラハ拂渡可申若適當ナラサル時ハ賣拂不致候事

一若シ落札之者兩人以上衝合其沽價適當ナル時ハ關取ヲ以テ其買主ヲ可相定事

一落札之上ハ價之總額ヲ算シ即日買主ヨリ其五分一ヲ運上所ヘ納ムヘシ殘五分之四ハ入札之日ヨリ七日内ニ皆納可致右皆納之節米穀之斤量掛ケ改メ買主ヘ引渡可申事

一殘金納方七日ヲ過ル者ハ前條五分之一之手附金ハ買主之損失トナルヘキ事

一殘金皆納之上尚運上所庫中ニ積置シヲ願者ハ借庫

規則ニ從ヒ藏穀料可差出事

一斤量改方ハ穀物之俵數ニ應シ三十俵ニ付三俵之割合ヲ以テ關取ニテ其俵ヲ定メ斤量ヲ改メ之ヲ平均シ一俵之斤量正味若干風袋若干ト定メ之ヲ算當シ則一俵之正味斤量平均百斤ナラハ百俵ハ一萬斤千俵ハ十萬斤ト定ムヘシ若シ買主大ニ輕重差異アルト見ル氏ハ自費ヲ以テ俵毎ニ斤量ヲ掛改メ明瞭ニ其正味有價ヲ定ムルハ勝手タルヘキ事

一右落札之米穀ヲ買主ヨリ他人ニ賣渡ストモ其米穀之輸出ハ元買主之名前ニ限り差許可申事

右之通相定候事

壬申正月

以手紙致啟上候然ハ去ル十一月廿八日附ヲ以我政府貯
藏之米穀國內有餘有之節公之入札ヲ以テ内外人民ハ輸
出可差免旨及御通達置候處米ル十七日神奈川縣蓮上所
於テ称右入札興行可致候則入札規則寫御心得迄ニ差進
候右可得御意如此御座候以上

明治五年壬申正月十日

外務卿 輔

各國公使

閣下

同文言

外務少丞

各總領事

貴下

米穀入札賣渡規則

一 米穀輸出制禁之儀ハ從來之通ニ有之然レ此後國內
有餘有之節ハ時宜ニ因リ大藏省貯藏之内都合見計ヒ
諸開港場ニ於テ海外輸出之為メ公之入札ヲ以テ内外
人民ハ賣渡可申事

一 拂渡之日限并賣渡スヘキ石高ハ入札日限前ニ米穀ヲ
賣渡セル地ノ運上所前ニ張出シ置可申事

一 入札望之者ハ入札日限前日迄ニ運上所ハ申出候ハ、
在米一覽可為致事

一 入札ハ開札當日十二時迄ニ其運上所ハ可差出事

一 入札ニハ可買取米穀之石高可買取價一百斤ニ付金貨
又ハ銀貨若干圓洋銀何枚ト可記載事

一開札ハ當日午後第二時諸入札人之目前ニ於テ公ニ披封致ヘキ事

一開札之上其落札之價適當ナラハ拂渡可申若適當ナラサル時ハ賣拂不致候事

一若シ落札之者兩人以上衝合其沽價適當ナル時ハ關取ヲ以テ其買主ヲ可相定事

一落札之上ハ價之總額ヲ算シ即日買主ヨリ其五分一ヲ運上所ヘ納ムヘシ殘五分之四ハ入札之日ヨリ七日内ニ皆納可致右皆納之節米穀之斤量掛ケ改メ買主ヘ引渡可申事

一殘金納方七日ヲ過ル者ハ前條五分一之手附金ハ買主之損失トナシ相當ト思フ時ハ再ヒ公之入札ニ出スヘキ事

一殘金皆納之上尚運上所庫中ニ積置シテ願フモノハ借庫規則ニ從ヒ藏敷料可差出事

一斤量之改方ハ穀物之俵數ニ應シ三十俵ニ付三俵之割合ヲ以テ關取ニテ其俵ヲ定メ斤量ヲ改メ之ヲ平均シ一俵之斤量若干ト定ムヘシ則一俵之斤量平均百斤ナラハ百俵ハ一萬斤千俵ハ十萬斤ト定ムヘシ尤大ニ輕重差異アルト見ル時ハ俵毎ニ斤量ヲ掛改ムヘキ事

但風袋モ此例ニ照シ平均法ヲ用ユヘキ事

右之通相定候事

辛未十二月

我十二月晦日付貴札致拜見候然ハ米穀輸出之儀ニ付我
十一月廿八日之書翰之御回答トレテ云々御申越之趣承
知致候乃チ左ニ再答申進候貴翰中ニ近來我國凶歉之時
ハ海外ヨリ充分之輸入ヲ得テ國民飢饉之患無之ニ付豊
年ニ餘リアル節ハ多少海外ニ輸出候トモ決レテ患害ヲ
止セス候ニ付自在貿易可然旨御申述有之程之儀ニテ固
ヨリ右輸出ハ各外國人之望ム所ニ候ハ氏國內之聲息未
タ充分行届カサル内自在ニ為取扱候テハ諸方豊凶之差
有之節邊境之民大ニ難澁ヲ受候様可相成然ル處大藏省
之藏米ハ租税ニ收納致候者故右ヲ賣拂ハスレテハ國家
之財政不相立候儀ニテ敢テ人民ト其利ヲ爭フ為メニハ
無之素ヨリ貴國ト條約中米穀ハ積荷トレテ輸出スル事

ヲ許サストノ旨趣ニ關係無之故ニ右可賣拂有餘之分ハ
開港場ニテ公之入札ヲ以テ内外人民へ賣渡又時トシテ
政府ヨリ直ニ輸出モ可致事ニ相決シ其旨去ル十一月廿
ハ日附ヲ以テ申進御承知有之處一時米國某商社へ特許
ヲ與へ候趣謬說紛起ニヨリ名外國人之嫌疑ヲ米シ貴翰
中ニモ縷々御申述之趣モ有之候へ右ハ過日御面晤ニ
モ申述候通り政府ヨリ直ニ輸出致ヘク分ヲ一時米國某
商社へ申付大藏省之為メ用達シテ為取扱候儀ニテ其為
メ百ニ付二五ノ〇錢差遣シ運送并賣捌方為致候事ニ有
之素ヨリ此商社ニ限り申付候譯ニハ無之何レノ商人タ
リトモ右ニ勝リ便利之方法ヲ以テ取扱候モノニハ尚又
相任セ候儀モ可有之候然レハ決シテ一人又ハ一社ニ殊
典ヲ與へ候儀ニ無之段御疑團氷解可有之事ト存候尤公

之入札ヲ以テ可賣拂トノ條ハ別紙書翰ヲ以テ日限御通
達ヲヨヒ候間右ニテ御承知可被下候貴報旁可得御意如
此御座候以上

壬申正月十日

卿 輔 名

英國代理公使

閣下

改正米穀入札賣渡規則

一 米穀輸出制禁之儀ハ從來之通ニ有之然レトモ此後國
内有餘有之節ハ時宜ニヨリ大藏省貯藏之内都合見計
諸開港場ニ於テ海外輸出之為メ公之入札ヲ以テ内外
人民ハ賣渡シ可申事

一 可賣渡石高並ニ開札日限ハ一週歟又ハ二週日前ニ米
穀ヲ賣渡セル地之運上所ニ張出置可申事

一 入札望之者ハ開札日限前日迄ニ運上所ハ申出候ハ、
在米一覽可為致候事

一 入札ハ開札當日十二時迄ニ其運上所ハ可差出事

一 入札ニハ米穀一百斤ニ付金貨何程ト可記載事

但シ右金貨之代リニ銀圓洋銀丈ケハ其時々之市中

相場ヲ張出シ置以較計算之上請取可申事

一開札ハ當日午後第二時諸入札人之目前ニ於テ公ニ披封可致候事

一開札之上其價位適當ナリトセハ最高之入札ハ賣渡可申若シ其價位不適當トセハ賣拂不致候事

一入札ハ其差出セシ順序ニ從ヒ番號ヲ記シ置開札之節其價位同様ナル時ハ先番之方ヲ落札ト相定可申事

一若シ一度之入札高ヲ數口ニ分ル時ハ其口毎ニ番號ヲ記載シ入札場へ張出シ置ヘシ故ニ入札望ミ之者ハ一口又ハ數口ニテモ番號ニ隨ヒ別ニ入札可致候事

一右數口ニ分別シ時之開札ハ其番號毎ニ價位ヲ比較シ其價適當ナリトセハ其口限リ最高之入札人へ賣渡可申事

申事

一落札之節ハ買主其場ニ於テ買受證書ヲ差出可申右買

受證書差出候節約定金トシテ入札セシ米價之總額ヲ算シ其割五分ヲ_五運上所へ納ムヘシ尤殘リ十

分之八五ハ開札之日ヨリ十四日之内ニ皆納イタシ落札之米穀斤量掛改メ總數引取可申事

一殘金納方十四日ヲ過ル者ハ前條割五分之約定金ハ買主之損失トシ米之儀モ大藏省之都合ニヨリ再ヒ入

札ヲ以賣拂可申事

一右日限通り殘金ヲ上納シテ猶其米穀ヲ運上所庫中ニ積置事ヲ願フモノハ借庫規則ニ從ヒ藏敷料可差出候事

一斤量改方ハ二百俵棹ニシテ三俵ハ渡方ヨリ三俵ハ受取方ヨリ撰ミ出シ都合六俵ヲニツニ分チ三俵ツ、秤

ニ掛ケ改メ正味若干風袋若干ト相定其平均ヲ以二百
俵毎之正味有質ヲ合計スヘシ若シ買主大ニ輕重差違
アルト見レ時ハ自費ヲ以俵毎ニ掛ケ改メ明瞭ニ其正
味有質ヲ定ムルモ勝手タルヘキ事

一秤之錘ハ買方ト賣方ト協和同意シテ双方ニテ取扱可
申事

一右落札米穀ハ其米之積置アル藏場ニ於テ引渡可申事
一米渡方数日ニ沙候即ハ日々請取渡相濟候丈之米價ヲ
算計シ當日相納可申事

一落札之米ヲ輸出スルニハ買受シ即相渡セシ落札證書
ヲ持參シテ運上所ヘ願出輸出免狀ヲ請取可申事

一右落札之米穀ヲ若シ買主ヨリ他人ニ賣渡トモ其米穀
輸出ハ元買主之名前ニ限り前條之手續ヲ以差許可申

事

右之通改定イタレ候事

日本國外務大丞後四位平義達書ヲ

朝鮮國禮曹參判某公閣下ニ呈ス

我

邦戊辰ノ歲國制一新セシヨリ以來

天子親政シ幕府ヲ廢シ

太政官ヲ置キ封建ヲ革メ群縣トナス是ニ於テ世襲ノ

官皆其職ヲ罷ム義達力如キモ亦對馬守ノ任及左近

衛少將ノ職ヲ解キ并ニ

我

邦ト

貴國ト交際將命ノ世職ヲ止メ更ニ義達ヲ以テ外務大

丞ニ任シ外務卿ヲシテ

旨ヲ傳ヘシメテ曰ク嚮ニ

朝廷

朝鮮國ト舊盟ヲ尋シテ欲シ汝ニ命シテ其事ヲ幹セ
シム而ルニ外國交際ノ一ニ至テハ則外務省ヲ置テ
之ヲ管ス故ニ昨年十月又外務官負某等ヲ遣ハシ往
テ東萊釜山兩使ニ晤シ

本邦誠意ノ在ル所ヲ陳述セシム而シテ彼尚未タ之ヲ
領悉セズ今汝カ世職ヲ解クト雖モ其舊交素アルニ
ヨリ汝ヲ現官ニ任シ更ニ

兩國舊交ヲ尋クノ事ヲ告ケシム汝須ラク克ク

朝廷ノ盛旨ヲ體認シ速ニ使ヲ差シ以テ其狀由ヲ諭シ
並ニ彼此唇齒ノ間宜シク舊交ヲ脩メ新盟ヲ講スヘ
キノ理ヲ説キ

國家善隣ノ誠意ヲ達シ以テ永遠不渝ノ良圖ヲ成スヘ
シ義達敬テ其命ヲ奉シ既ニ其事ニ從フ乃チ家人某
ヲシテ以テ此事ヲ報セシム

閣下其レ之ヲ明諒セヨ義達故アリ名ヲ重正ト改メ
ム合併拜告ス肅此不宣

大日本國外務大丞後四位平義達呈書
朝鮮國禮曹參判某公閣下

我

邦自戊辰之年國制一新以來

天子親政廢幕府置

太政官革封建為郡縣於是世襲之官皆罷其職如義達亦解

對馬守任及左近衛少將官並心

我

邦典

貴國交際將命之職更以義達任外務大丞矣今又蒙令

外務卿傳

旨曰嚮

大

正

月

朝廷欲興

朝鮮國尋舊盟而命汝幹其事但至外國交際之事則既置

外務省管之故昨年十月特遣外務官負某才往晤東萊金

山兩使以令陳述

本邦誠意之所在而於彼國尚未領悉之今雖解汝世職以其
舊交有素任汝現官吏令汝告尋

兩國舊交之事汝須克體認

朝廷之盛旨速差使以語其狀由並說彼此唇陸之間宜修舊
交講新盟之理以達

國家善隣之誠意以成永遠不渝之良圖義達敬奉具

命既後其事乃使家人某以報此事

閣下其明諒焉義達有故改名重正合併拜告肅此不宣

大日本國外務大丞後四位平重正呈書

朝鮮國東萊金山兩令公閣下

我

邦政體一新之狀及重正不能自司

兩國交際將命之職等情乃曾使家人某報知之諒

兩公閣下已賜垂鑒焉蓋

本邦

貴國隣誼之深業既三百有餘歲重正歷經為之幹施今也

朝廷免重正之職猶念數百年舊交之情好特任重正外務大

丞命告

兩國尋交之事

本省更令原差官負吉岡弘毅等拜晤

兩公閣下備語其委曲又陳述尋交盛意之所任其惟
兩公閣下以

兩國良圖為重從善款接吉岡弘毅等聽納其所陳述萬勿
反拂

本省懇薦之情誼為幸誠信乎在言餘表出伏冀
兩公閣下其諒之矣肅此不宜

森山廣津權兩大錄ヨリ伺書

今般宗氏ヨリ報知トシテ被差渡候書契舊套ヲ脱却シ現
今新印被相用候ニ御決定相成候上ハ先日見込陳上候通
リ彼其書契ヲ不受ハ必然ト存候ヘ氏猶臨機應變ニ說破
シ曲直條理ヲ講明可致ハ勿論之處彼是頑愚ヲ逞シ候氏
ハ對州士民ヲ纏メ其結局一應韓土ヲ引揚可申覺悟ニ候
事

一假令引揚候氏今ノ草梁館地ハ取留メ置後圖ノ便リト
致度就テハ十人廿人ノ者ハ撰ミ殘シ度尤其食物等ハ用
金内ヨリ調置候積リノ事

但人數殘置候事ハ其機ニヨリ候ヘ氏西國商民ノ○
モ有之候間其内情ヲ察シテ殘シ置者ハ總テ商民ノ

姿ニテ指置クヘキ方ト存候

一 弥拒絕ノ姿ニ至リ候ハ引揚候事勿論ニ候ヘ和絶
ニ不拘後前指渡有之候内無用、後ヨリ漸々為引取人数
減少致置度事

一 成否相決不申内ハ所謂私中ノ私ナル貿易ハ兩國民情
ニ随ヒ商人共ノ見込ニ通り差許シ試度事

一 成否未決中漂民有之節或ハ留メ置或ハ差渡し候儀ハ
時機ニ應シ差圖ニ及候様仕度事

一 圖書相改候ニ付テハ歲遣船送使等ノ事ハ令セスシテ
廢止相成候儀ニ付微臣等下向途中長崎表ヨリ米鹽等不
可欠ノ品ハ凡二三ヶ月分ノ手當為積込持渡リ度候事

但此分ハ面々朝鮮賄料ノ内ヨリ準備可致積リ事

後外務卿大輔清國李鴻章ハ照會文及ヒ差負委任擬案

附派使領事等ニ付照會案



大日本外務卿副島外務大輔寺島照會ヲ為ス事明治四年

九月十九日我

欽使伊達歸米リ即チ

貴大臣ト議定セシ條規及通商章程等ヲ奏呈シ復

命事畢ル既ニ本卿大臣等

上諭ヲ奉ス曰ク前者兩國全權大臣修好通商ノ約ヲ議立
ス其條款ヲ查スルニ以テ各自照シ行フ可シ然レモ未
歲ハ我レ歐西各國ト條約ヲ改修スルノ期至ルヲ以テ
今後改議セント欲スルノ事件ヲ大略目論ミ置ケリ故
ニ今度ノ兩國條約ヲ以テ一々突合ハセ其内ニ改刪ス
ヘキ處アラハ其細領ヲ舉テ清國大臣ニ照會シ預メ改
府ヘ伺ヒ究メ置テ以テ批准遣使シ本約ヲ互換スルニ
便セヨト本卿大臣等謹テ

諭旨ニ遵ヒ右條約ヲ將テ目論ミノ事件ト突合ハセ逐條
查覈メ其細目ヲ題ス左ノ如シ

修好通商各條款ノ内領事ノ權利及ヒ商民ノ罰款従前
我國ト歐西ノ間ハ彼商民米ル有テ我商民注ク無

シ然レモ今番彼ト議スルニ我商民モ亦彼ニ往ンヲ
以テス故ニ我國ニ於テハ彼等ノ國互ニ結約メ行フ所
ヲ照シテ彼ヲ待ント欲ス我今清國ト定ムル所ノ條約
ハ以後歐西ト改約スルノ時ニ至テ必更正ヲ行フヘキ
者有リ故ニ未タ永久ノ約ト謂フニ足ラス是ヲ以テ俟
後應サニ改正ヲ議スヘシ

一修好條規第二條 調處之約

公法書ニ據ルニ兩國既ニ和誼ヲ結テハ事ニ遇ヒ後中
調處シ其友情ヲ盡サン此條無シト雖モ行フヘキノ
權アリ故ニ此條ハ須ク裁撤ヲ議スヘシ

一修好條規第十一條 刀械之禁

刀械ノ我國人ニ於ケル准ルス有テ禁スルヲ無シ惟
清國ニ在テ禁スル所ナリ是レハ修好條規第八條ニ從

ヒ我理事官ヨリ之ヲ取締ムレハ約ニ載セテ明禁スル
ヲ庸ル母ル可レ故ニ此禁約ハ須ク削除ヲ議スヘシ
以上ノ綱目已ニ奏准ヲ經タリ此レカ為メ本卿大臣等
文ヲ備メ

貴大臣ニ照會シ並ニ官何某ヲ派委シ情ニ據テ詳カニ
申サシム希クハ即チ其陳述スル所ヲ查照メ可否裁覆
ヲ為ス一ヲ煩ハシ本卿大臣等ヲシテ能ク

貴大臣ト時相備文往来メ預メ擬題岩准ヲ請ヒ以テ
批准互換スルノ地ト為サン一ヲ得セシメハ幸莫加焉
須ク照會スル者ニ至ルヘシ

右 照 會

大清協辦大學士直隸總督北洋通商事務全權大臣一等肅毅伯李

外務省
明治四年十二月
印
日

外務省印

委任要旨

官 姓 名

今和清約成ルニ因テ特ニ

欽命ヲ請ヒ爾ヲ派メ某々官ト為シ清國ニ遣ハシ今番本
卿大臣等

旨ヲ奉シ兩國條約内ニ於テ彼國大臣ニ照會シ預メ擬題
改刪ヲ行フ各事宜ヲ將テ爾ニ委ネ本卿大臣等ノ公文
ヲ通スル毎トニ詳ニ参述解説ヲ加ヘ懇ニ妥協ノ咨准
ヲ請ハシメ以テ隨時公文注来シ條款ヲ修改シ善後互
換ニ便ナラシム期ス務メ必ス兢々ト職ヲ盡シ派委
ノ意ニ負クヲ母レ所有須ク参述ヲ加フヘキノ情節左

大改

ニ開列ス

一公文ニ開ク所ノ領事權利及ヒ商民罰款等俟後改議セ
ント欲スル所以ノ者ハ始我欽使清ニ請フ所ノ約ハ彼
ト外國ト約セル例ヲ倣フ清ノ欽使云ク我ト外國ノ約
ハ有来無往ヨリ成ル惟貴國ハ最隣近ナルヲ以テ宜ク
有来有往ノ約ヲ成スヘシト遂ニ兩國外交ノ各例ヲ將
テ同條ニ合載シ只一本ニ據テ兩國共用スレハ以テ各
自照ラシ行フ可シト雖モ来歲我歐西ト約ヲ改ルノ案
欽使清ニ適クノ後ニ起ツテ專ラ往來劃一ノ約ヲ改メ
成サント擬定スルニ回リ此條約ヲ嗣後我開港場ニ施
サンニ右擬案ト合ハサル者有ルヲ以テ憾ト為シ

朝議必ス本約ヲ互換スル以前ニ於テ解説熟商ヲ加ヘ
始メテ批准ヲ行ヒ使ヲ發セント欲ス且現在我各港ニ

住居スル清民數千ニ下ラス兩民相狎ルノ間毎トニ
奸猾ニ頼リ徒多クメ人ヲ欺キ法ヲ犯シ互ニ詞訟ヲ興
シテ地方ノ累ト為ル丁歐西諸國商民ノ衆キヨリ甚キ
者有リ即今清國新タニ理事官ヲ派シ来ルモ須ク先ツ
實地ノ情形ヲ熟察メ尚隨時酌議スヘキノ處有ルヘケ
レハ其緒ニ就クヲ俟ツノ間ハ未タ能ク約ヲ照シテ會
同訊断ヲ行フニ及ハサルヘシ又後附兩件ノ如キハ大
局ニ碍リ有リ是ヲ以テ一併商及スル者也

一調處ノ條ハ美國清ト約スル所ノ文ニ據テ查スルニ美
國ハ惟清ノ為メニ從中調處セント云ヒ即チ我國美ト
約スル所モ亦是同然ニメ皆偏為ニ屬シ美國一面ノ詞
ヲ為スノミ而シテ我欽使清ト互約セシハ蓋シ清美條
約ノ漢文ニ據テ准シタル也今美文ヲ閱シ其然ラサル

ヲ知レハ改メサルヲ得ス清ト美ト我ト美トノ例ニ倣
フテ偏為ヲ成サンモ亦不當ト為ス故ニ裁撤ヲ議スル
也

一刀械ノ禁ハ我國官吏紳商常ニ雙刀ヲ佩ヒ農工商賈モ
時アツテ單刀ヲ帶ル本ト礼制ニ係レハ公禁スルニ便
ナラス蓋シ清國ハ常ニ刀ヲ帶サルヲ以テ我商民ノ彼
地ニ在テ刀ヲ帶ルヲ准ルサ、ルナレハ我理爭官ヨリ
其禁スル所ヲ知テ我商民ニ令レ犯ス丁無ラシメハ可
也故ニ削除ヲ議ス

一公文ノ外通商章程第二十八款進出口ノ税則ハ須ク我
國各港ニ於テ其海關成規ヲ照シ收税スルヲ議スヘ
シ

以上各款ニ就キ本卿大臣等應サニ彼國大臣ト時相備

文往來ノ預メ擬議ヲ行フヘキ事宜ヲ除クノ外所有約
面ノ各條款ハ兩國遵行セサルモノ無シ
右須ク知悉スヘシ

外務卿 副島種臣

外務大輔 寺島宗則

外務

明治四年辛未十二月 日

省印

照會
外務省
印

大日本外務卿副島外務大輔寺島

為

照會事明治四年九月十九日我

欽使伊達歸來即將與

貴大臣議定之條約規及通商章程等奏呈

復命事畢既而本卿大臣等奉

上諭前者兩國全權大臣議立條約通商之約查其條款可以
各自照行惟以米歲我與歐西諸國改條約之期將至已
將今後意欲改議事件大略擬定在案著將此次兩國條約
細為核對若有應行改刪之處即須舉其納領照會清國大
臣預為擬題略准以使批准遣使互換本約欽此本卿大臣
等欽遵

諭旨當將此約就該擬案事理逐款查覈題其領目如左

一修好通商各條款內所有領事權利及商民罰款後前我國與歐西間彼商民則有來我商民則無往而今向彼議以我商民六欲往也故在我國須照凡彼諸國互相訂約所行而待彼諸國耳我今與清所定條約至他日與歐西改定我約之後必有須行更正者則未足謂永久之約是以俟後應議改正

一修好條規第二條調處之約

據公法書有云兩國既結和誼若遇事從中調處盡其友情雖無此條有權可行故此一條須議裁撤

一修好條規第十一條刀械之禁

刀械之於我國人也有准無禁惟清國所禁耳此遵修好條規第八條由我理事官檢束之可毋庸立約明禁也故此禁約須議削除

以上綱目已經奏准為此本卿大臣等備文照會

貴大臣並派委某官某據情詳申希即查照其所陳述可否煩為裁覆俾本卿大臣等能與

貴大臣時相備文往來預請擬題略准以為

批准互換之地幸莫加焉須至照會者

右

照

會

大清協辦大學士直隸總督北洋通商事務全權大臣一等肅毅伯李

外務

明治四年十二月 日

省印

大日本外務卿副島外務大輔寺島

為

中謝並照會事曩者大藏卿伊達使于

貴國幸值

貴爵閣大臣暨應泉臺陳道臺早奉

欽派接議條約事宜况蒙

盛誼厚待實所罕遇遂獲永結兩國之好旋國及命殊慙
朝廷嘉悅本卿大臣等知之均深欣感之至肅此中謝茲奉
上諭和清兩國經已修好通商合亟揀派妥員遣于清國口岸
監視我國民交涉事宜欽此本卿大臣等隨即銓選某官某
姓名為某々官遣于

貴國駐劄自今以後每有本卿大臣等與

貴大臣曰公往來文件要其專候收遞便令解通文內情節

時加參述解說以期往來兩得妥協又派某官某姓名為
領事留滬管理本國人民通商事務所有屬負從之為此備
文照會

貴大臣希即查照除接留某官某姓名聽候辦事外將該領
事等負一節煩為移行上海道憲存認該官負才使其遵約
供職可也須至照會者

石

照

會

大清協辦大學士直隸總督北洋通商事務全權大臣一等肅毅伯李
大清武英殿大學士兩江總督南洋通商事務全權大臣才毅勇侯曾
○曾國藩、八前同父ヲ別紙ニ認ム但シ貴爵明、貴、李
二作

外務省
明治
年
印

月日

委限要旨

官 姓 名

今日和清約成特請

欽命派爾為

官遣于清國駐劄並將此番本卿大臣等

奉

旨於兩國條款內照會彼國大臣預行擬題改刪事宜委爾每
遇遞叔注來公文時詳加參述解說懇請妥協咨准以期隨
時備文注渡修改款便於善後互換務必兢兢盡職毋負派
委之意所有須加參述情節開列于左

一公文所開領事權利及商民罰款其所以欲俟後改議者始
我欽使所請于清國之約仿照彼與外國所約之例清國欽
使則云我與外國所定之約成于有米無注惟以貴國最為
隣近宜成有米有注之約遂將兩國外交各例併載同條止

據一本兩國共用可以各自照行只因米歲我與歐西改約之案起于欽使遼清之後業已擬定專欲改成注米劃一之約如將兩國條約嗣後施于我國各港以有不合于該提案者為憾

朝議必欲於互換正約之前細加解說熟商始行批准發使況現在我各港所住清民不下數千兩民相狎之間每多奸猾已賴之凌欺人犯法互與詞訟為地方累有甚于歐西諸國商民之眾者即今清國新派理事官米須先熟察實地情形應尚有隨時酌議之處俟其就緒之間未及能照條約會同訊斷又如後附兩件有碍大局是以一併商及者也

一調處一條據查美國與清所約之文美國心云自為清國該中調處即我國與美所約亦同然皆屬偏為美國單作一面之詞而我欽使與清互約者蓋據清美條約漢文而准之

也今閱美文知其不然則不得不改之或仿清國與美我國與美之例竟成偏為之約亦為不當是以議裁撤也

一刀械一禁論我國官吏紳裔常佩雙刀即農工商賈有時亦帶單刀亦係札制而不便于公禁之也蓋清國以不常帶刀故不准我商民之在彼地者帶刀則由我理事官知其所禁令我商民無犯可也故議削除

一公父所議之外通商章程第二十八款所載進出口稅一例須議在我國各港則應照該海關成規而收稅

一除就以上各款本卿大臣等應與清國大臣時相備文往來預行擬議事宜外所有約面各條款兩國無不遵行

右須知悉

明治四年辛未十二月日

外務卿副島種臣

外務大輔寺島宗則

本月廿二日。貌列賴國領事。フルキユス。フロウル。ス。罷越過。
日中伊萬里縣管內。深堀近傍。人民之內。異宗之徒。數多轉移。
為致候趣聞。込候處。事賓相違無之哉。承知致度申出候。二付。
當縣於テ右體之風說。承知不致旨。及返答候處。同縣出張之
役負。尋問之上。報知致吳候様申立候。二付。相違申出候。別
紙書付。ハ書翰相添。及返答置候。二付。御舍之為。此段申進
置候以上。

辛未十一月廿六日

長 寄 縣

外 務 省

御 中

別紙

以手紙致啟上候。然ハ昨廿三日。七時。一昨。御談示之趣。

ヲ以テ當表在勤伊萬里縣役負（相違候處別紙之通申
出候ニ付不取敢及報告候右為可得貴意如此御座候以
上

明治四年辛未十一月廿四日

長崎縣大參事森岡昌純
長崎縣大參事石田忠卿

額列顛兼佛朗西領事

マルキユスフロウ

貴下

別紙

今般伊萬里縣管内深堀近傍之人民佐賀へ令移住候哉
之次第委岡士ヨリ問合候ニ付私致承知候分可相達旨
承知仕候右ハ先般六七十人佐賀へ呼越候由風説承居
候へ此元來所有其職卑官ニテ為確乎御答難申上候條

則其段縣廳へ掛合越可申候此段致御届候以上

辛未十一月廿四日

伊萬里縣 平石十郎

ジャツパンガセツト新聞抄譯

拙者考フルニ既ニ日本國ハ幾ヶ程開化文明之地へ進歩
セシヤヲ文明諸國へ顯スヲ專用ナリ

去第四月中ノジャツパンガセツト新聞ニ於テ知ラル、
通り日本政府ヨリ我公使へ示サレタル慥ナル約束ニ及
キ又候今般異宗信仰ヲ廢セント粗暴ノ處置アリタリ
本月十七日ニ何等ノ次第モナク大抵一家ノ主人六十名
ヲ苛酷ニ其家ヨリ追出シ蒸氣船ニテ何クヘカ出帆致シ
其行滯ヲ知ル者更ニナシ右不幸ナル追放人ハ長崎近傍
ノ咸村ニ有之候且近々吟味ノ役人此村ニ来リ二年前浦
山村ニ於テ被取扱候如キ處置有之趣也○斯異宗ノ人民
ヲ賤ムルニ方リ今般外國ノ善良ナル法律ヲ學ヒンタメ

使節ヲ送ルハ何事ナルヤ○右ノ如クシテ我政府ノ懇親
ヲ得ントイフハ大膽ナラスヤ且恥モシラス先前ノ約束
ヲ破ルハ我公使ヘ對シ甚タ不敬トイフヘシ○故ニ日本
ニ於テハ我代理公使ハ輕蔑ヲ受ル者ニシテ我公使同様
ノ尊敬ヲ受ケサルモノトスル也我當時ノ公使右粗暴ノ
所為ヲ知ルニ於テハ必ス公ニ申出先前ノ約束ヲ踏ミ
天皇政府ヘ掛合可申故今早ク其ノ過リタル事ヲ合點セ
シヲ要ス

千八百七十一年第十二月廿六日

ジャッパングゼット

新聞出板人

貴下

深堀邪徒一件

一十一月九日高濱村市右衛門用事アリテ登ノ倉莊屋ヘ
参リ候ニ莊屋曰此頃巨魁ノ邪徒御捕ヘニ付混雜致候
也ト

一同十日谷口礼三大山村ニ参リ候ニ邪徒兩三輩倚集リ
衣服相持ヘ居候テ曰ク一昨日ハ日當所三藏ハ既ニ急
御用ニテ深堀役場ヘ参リ我輩合メ八人今日ニモ参リ
可申筈ナリ

一五島伊三郎教示方當十三日ヨリ帰國可致語リ有之由
一先日今里縣士曰此度之蒙置ハ巨魁ハ入牢中等ハ凌罪
薄信之者ハ其所ニテ蒙置ノ積リノ由云々成程昨日大
山殘徒ノ語リニ我オモ格別ノ儀ハ有間敷定テ凌罪ニ

被仰付ル、ナラント

辛未十一月十一日

一同月同日右書付ヲ以テ縣廳へ罷出石田大恭事ニ面會
シ差出候處曰ク成程今里縣モ此節ハ七十餘人召捕候
由則同縣士米テ曰ク此上餘ノ等閑ニ付

天朝へ奉伺候處御附紙ニ嚴密ニ取締可致ト有之仍テ
大槩ニハ嚴敷取締可仕義ト存ス併シ外國ヨリ彼是ア
リテハ忍入故格別庶卒ニハ不致ト石田曰ク何様之御
取締ッ今里縣士曰ク穩ニ呼寄セ其方共家業急リ候故
自今何處へ開拓等ニ可忝尤家内引連度候ハ、其儀可
容ト箇様ニ申付候積リ也ト石田曰ク若シ異人尋候ハ
、如何被答候哉今里縣士曰ク右ノ如ク法敷ニ不閑家
業急リ候ニ付開拓處々へ可遣ト答へ猶嚴酷ニハ致ス

間敷ト

一同十三日二字今里縣士樋口千八眼色ヲ変シ来ル曰ク
私ニ此間五六日深堀配下ヲ巡遊致候ニ先達テ渡邊殿
御申聞ノ儀ト今里縣ノ處置ト齟齬スルニ似タリ其所
以ハ今里縣ヨリ断然六十七人名捕へ暫時深堀ニ入穿
セシメ竟ニ蒸氣ニ乗セ連行申候其人名略之
一賤津黒崎之間ニテ廿人餘脱走致候者有之由姓名ハ追
テ取調可申云々

一邪徒被捕候島々村々ハ正月初三日之如ク衣服律發ニ
着飾リ何時御用ニテモ不差支様相待居候由

エレソール一件

一十一月十六日夜山村三郎尋ネ候處エレー曰ク彼方ダ

ウシナシタカト察シマシタ僕^{島原}有^者田ニモ諸所尋ネ
サセマシタレ氏一向分リマセヌ能来マシタト親布挨
拶也○又曰ク彼方ハ宿ハ何處ニ居マスカ山村曰ク今
日マテハ肥後問屋ニ居マス私ハ宿ヲ定メマセン定ム
レハ人カ尋ネ来テ内實ノヲ知マスエレー曰ク彼方
ハ宿ヲカヘマス人チヤト○又曰ク此教最暫クニテ開
ケマセウ亦氣支ナシニ来ラレマセウ明年ノ條約ニハ
大略開ケマセウ○又曰ク入牢イタシマシタ肥後ノ人
ハ道^{未詳}牢ヲ出マシタト○又曰ク學校ノ教師スド
ート肥後學校ニ行イロク心配イタシマスト云々○又
曰ク私ハ大坂ヘ行等ナレ氏行マシト思ヒマス如何ト
ナレハ是コテ三四年長崎ニ滞留シ肥前肥後筑前豊後
等ヨリ數十人尋ネ来ヤウニナリマシタ明年此教ヲ開

ケマスレハ大ニ都合宜布アリマス是ヨリ大阪ヘ参リ
マスレハ新ニ人數ヲ作ラネハナリマセヌ依テ此地ニ
居カ便利ナリト大ニ條約ヲ力ニシ待候

以手紙致啟上候然ハ先般麻兒島藩前田十郎左衛門徳島
藩伊月十郎航海術修業之為貴國軍艦ハ為衆組差出候處
航海中而已ニテハ成業之見留無之處此好機會ヲ幸ヒ貴
國ハ到着之上ハ海軍學校ハ入門致シ學術研究為致度旨
我政府於テ企望ニ付閣下ヨリ貴政府ハ御建言之上右由
學之儀御周旋被下度懇請イタシ候且又既ニ貴國ハ留學
致居候中御門寛麻呂儀モ前兩人同様海軍學校ハ入門為
致度候間是亦閣下ヨリ御周旋之儀御頼申候此段可得御
意如此御座候

庚午七月廿日

卿

輔

英國公使

閣下

一筆啟上仕候然ハ私儀海軍脩行ノ至願ニテ昨年中奉願
出候通當國外務省ハ御頼入ノ御手数數相調候儀ハ慥ニ承
知仕居候間當夏軍艦乗込脩行致度候ニ付其段敍島辨務
使廳ハ願入置候ハトモ折悪ク其頃政府向ヘ之掛合難取
扱譯柄有之由ニテ暫時見合居候内御同人附屬之御没人
不殘佛國ハ被差越其後上野大藏大丞殿ハ相願候處帰朝
前ニ差掛リ其邊之取扱シールト被申談置候由ニテ
候ハトモ同人儀ニ無程致歸國如何取計候哉相分リ不中
就テハ私儀當外務省ハ罷越直ニ頼入度奉存候ハトモ何
分脩行ノ身ニ御坐候ハ引請可申哉無覺束何卒此上乍
御手数數今一應當外務省ハ御依頼書并御添書御送り被下
度在候ハ右添書ヲ以テ當外務省ハ罷越速ニ相揃候様

仕度候間何卒宜敷御取計可被下奉願候

明治四年九月

中御門 寛麻呂

西洋千八百七十一年第十月十六日

外務大輔 殿

千八百七十二年第一月十三日戌辛未十二月十四日ニ當ル刊行ナ
ガサキガゼット新聞抄譯

當港ニアル西教ニ付テ其宗敵ナル岩倉ノ惡ムヘキ所業
ヲ速ニ制ビシ且

天皇陛下ニ於テ此ビースト畜養トノ惡行ヲ知覺シ賜ハ
、追放セラレシ宗徒ノ刑罰ヲ尚三倍シテ彼ニ加ヘ賜ハ
シテ將タ各國ノ目代モ奮發シテ此事件ヲ正直ニ
天皇陛下ニ報告センコト余カ輩ノ希望スル所ナリ

千八百七十二年第一月六日戌辛未十一月廿一日刊行ナガ
サキガゼット新聞抄譯

使節ノ長ハ萬民ノ知覺スル岩倉ナリ此人ハ西教ヲ信ス

ル日本人民トハ大ナル宗敵ニシテ今般泰西ニ航シ如斯
日本ニテ其宗旨ヲ信スル証ヲ見セントスルヨレ故ニ我
輩是ヲ聞ケハ實ニ其貧民ノ惻然ナルヲ察シ心ニ慙カス
ヘキナリ

此人外國公使等ニ對話ノ時ニ云ヘラク是迄所スル刑律
中ニ磔罪アレ氏今度其刑ヲ日本政府吏ニ改正シ左ノ如
ク其貧民ヲ寛ニ處セラレシトゾ但シ一ニハ寒中ニ衣服
燈明或ハ空氣モナキ不潔ナル厠ニ籠メ飢渴ニ苦シメル
ノ刑ニハ死シ難シテ苦痛ノ長キヲ謀シガタメ飽マテ
食ヲ勸メ竟ニ手足ヲ束縛シ極寒天ニ體ヲ裸シ其脊ヲ氷
結セシ池上ニ肆スノ刑三ニハ責戒ニ逢フ者人情ヲ缺ク
カ或ハ耶蘇ノ名ヲ誹謗スルカ自カラ發言セシメンガタ
メ口中ニ熱火ヲ食マスルノ刑也トゾ

右宗敵ノ岩倉亦云ヘラク只貧民已カ高祖ノ生死ヲ決ス
ル宗法ヲ他ニ明シ汝等國民ノ念スル宗門ニ入ルノ罪科
而已ナレハ政府ニ於テ其無辜ノ民ヲ寛典ニ處シ常ニ苦
ヲルナシト面ヲ飾リ割ヘ是ホノ事件ハ岩倉一己ノ謾
言ニアラサレ氏政府此先トモ前頭ノ所置ヲ要スルトノ
慮慮アレハ再ヒ其命ヲ遵奉スヘシト公使等ニ答ヘタレ
ハ其公使等ハ是ヲ聞キテ其謾言ヲヒタリトゾ

或ハ貴族等其女子ヲ文明國ニ教育セシガ為人使節ト共
ニ米國へ遣ハセシ由承知ス此舉ハ賞譽スヘキトニシテ
最上ノ舉動ト云ヘシ使節ハ訪問スル各國ニ於テ實効ヲ
建ツル一更ニ疑ヒナシ然レ氏其訪問ノ主意發覺スルニ
及ニテ尊重セラハヤ否疑フヘシ

大使節岩倉ハ我輩現今見聞スル苛酷ノ刑ヲ企ツル人ニ

シテ既ニ今般出船前其事ヲ發セシトアリ耶蘇教ヲ信ス
ル者ヲ奴隸トスル酋長ノ人ナルヘシ奴隸或ハ殺戮スル
ヨリ甚シキ苛酷ノ所置アリ則テ是ハ不正ナル者寄集ス
ル所ヘ耶蘇教信者ノ妻及ヒ娘數千人ヲ賣渡スナリ然
ルニ憐愍暴殺ノニツヲ迷ヒナカラ其親父配偶及ヒ兄弟
等岩倉ノ命アルニヨリ政府ノ不仁ナル人ヘ引渡サレタ
リ是等ノ件々ヲ我輩米國ニ於テ耶蘇教ヲ信仰スル婦女
子ヘ知ラシメンコトヲ希望ス前條ハ一千八百七十年第一
月廿二日ニ十一月附書記官ウチス君ヘ宛テシ合衆國公
使デロンク閣下ノ書翰ノ意ナリ

肥前國伊萬里縣ヘ御達

元其縣管下深堀之者共數名先般本縣ヘ引寄候由石之者
共儀當時管轄長崎縣ヘ早々引渡可申事

辛未十二月

長崎縣ヘ御達

當時其縣管下深堀之者共數名先般伊萬里縣ヘ引寄相成
候分同縣ヨリ引渡可申候間一應糾問ヲ遂ケ強テ罪状モ
無之候ハ、早々本所ヘ渡歸為致可申尤能々教誡ヲ加ヘ
心得違無之様可申付事

外務省第二部

第二部公信啟上仕候前々陳者先便第一部公信中申進候
通去冬十二月二十二日大副使初一行之モノ素港發軔直
様華府迄相越候積之場道中阻雪無據ヲタ州治塩湖府ニ
滯留候内本月七日大平洋郵船レヤツパン号桑港到着之
信有之必定政府之公書モ可有之存候ニ付早速以電信石
公書當所^エ相廻候様申遣候處^ハ違華府^ニ差立候趣ニ付
領事ブルックスオクデン迄出張森少辨務使宛之公書革袋
持参即截開キ第三部御用状落手致披見候第一第二兩次
之公信ハ多分華府ニテ落手可致存候
一中山内海兩人^エノ坂口宣大使^ニ差出候處大使ヨリ式
部取五辻ヲ以當人共^ニ御渡相成即兩人ヨリ之御受差進
申候間可然御取計有之度候

一深堀一條ニ付書類落手此才ノ瑣事都テ國家ノ大計ヲ
妨害之事ト杞憂不少兎角中外ノ御所置矛盾無之様御配
慮有之度竊祈罷在候

一中御門寛麻呂留學ノ義ニ付書類落手御申越之趣承知
イタシ候

一桑港出立以来道路并當所到着以後之事狀別紙畧日記
及新聞紙ニテ御承知被下度別ニ縷述不致候

一姫路中津田知事隨從トモ今郵船ニテ到着十一日當府
工到着イタシ候何レモ當國留學之志願之由ニ候

右第三席公信御報効近況申進度如此候宜敷御輔公工御
申陳可有之候也

壬申正月十二日

渡邊 洪基

田邊 太一

外務 大少丞

御中

辛未十二月十七日英國公使アダムスヨリ長寄宗民ノ儀
ニ付外務卿^ハ面談致度旨申越候ニ付同十九日副島外務
卿英公使館へ出張應接^ハ通リ

^卿伊萬里縣ヨリ届出候書面入御覽候尤モ此届書持参
ノ者長寄縣令等ト共ニ長寄^ハ貴國領事ニ面會此
書面相示シ候上領事ニハ右移民入牢ノ趣ニ聞込被
居候ニ付入牢ニテハ無之揚リ屋ト申所ニ入置有之
旨申答候處然レハ其趣公使へ報知可致被申聞候由
公使深堀ハ長寄縣管轄ニ候哉

移民ノ節ハ伊萬里縣管轄ニ候トモ其後長寄縣管
轄ト相成候

長寄領事ヨリ未タ表向報告無之候トモ拙者
伊人又長寄人ヨリ承リ込候ハ右人數ハ全ク切

支丹宗信仰人ノ由ニ候

切支丹宗信仰致居候哉否ハ不相分候ヘトモ一村ノ
協和ヲ相失ヒ候故說得迄ニ呼寄候事ニ有之殊更佐
賀ハ右人數可移住程ノ地所モ無之候

表向ノ届ハ兎モ角モ内實探索ノ報知ハ如何
探索ノ報未タ無之候ヘトモ呼寄候儀ハ無論明リニ
有之候尤別ニ苛酷ニ相涉リ候様ノ儀ハ無之

然レハ右移民ノ所置政府ノ御評議ハ如何一通
リ御尋相濟候ハ、旧地ハ漫住出来候儀歟

右方左様ニ相成可申

明後ノ郵船ニテ本國へ申遣度候間明午後マ
テニ御決答承リ度候

諾

右ニテ終

右ニ付同廿日花房少丞英公使館江罷越伊万里縣、御沙汰ニ相成大意ハ

深堀人民ノ内説諭ノ為佐賀城下へ呼寄候モノ共右手數相濟候ハ、早々住所へ送り返シ可申萬一未タ相濟サル儀モ有之候ハ、長寄縣へ引渡可申候事
右、趣御評決相成候旨同公使へ相示候事

過刺深堀異宗民二件書差進候處其頃島原表ニ係ル同
様ノ事件ニテ英公使ヨリ申立候儀有之右注渡書寫モ相
添可申ヲ取落候ニ付乃チ差進候也

申二月廿日

外務省

正院

御中

壬申正月十二日英公使へ渡来

我十二月廿六日附貴札致拜見候然ハ先頃島原表ニ於テ
新ニ切支丹信仰ノ者ハ對シ虐政相施候趣長寄在留貴國
領事ヨリ被届出候由云々御申越致承知候右ハ不容易儀
ニ付其筋篤ト取調候得トモ其事ハ跡方モ無之察スルニ
容冬同蒙ニ於テ曰藩札偽造ノモノ數名嚴刑ニ蒙候儀有
之定テ領事ニハ右等ノ儀ヲ訛聞被致候事ト存候右一條
ハ長寄在留貴國領事ト同所權令ト注渡書通有之且同所
新聞紙ニテモ右ハ訛傳ノ趣解解致置候間此上御疑念有
之間敷儀ト存信用候為念解解ノ辞入貴覽候右回答如
此御坐候以上

中正月十二日

外務卿 輔

英國代理公使

アダムス

閣下

當月十八日辨曆月廿七時刊行紙中ニ島原ニ於テ切支丹
宗徒ヲ追捕シ刑典ニ所セシ由ノ街説ヲ書載アリシハ全
ク謬傳ニテ去月五日辨曆月廿六時串同所ニテ命幣偽造
ノ罪人數名ヲ嚴刑ニ所セシ事アリシ故其事ヨリ附會ノ
説ヲ醸セシナラム看客以テ諒察セヨ

明治四年辛未十二月

辛未十二月廿六日英公使ヨリノ来柬

以手紙致啟上候然ハ此度島原表ニ於テ新ニ切支丹人ニ
對シ虐政ヲ施候次第長寄在留我領事ヨリ申来殘念ノ至
ニ候則別紙届書ノ通ニ有之候長寄ノ長吏右處置ヲ不知
体ヲ致候ハハ我領事ニ慥ナル見知人ヨリ致報知候儀
ニ有之候間相違有之間敷存候就テハ此度ノ儀可憐切支
丹人他ノ徒シ候而已ナラス殘酷ニ取扱甚寒ヲ侵凌致サ
レ遂ニ丈ガ爲數人致死去候趣ニ有之然ル處左様ノ儀決
シテ無之筈太政大臣ニ於テ拙者ハ御受合被成候上ハ右
様不仁ノ取扱貴政府ノ命令ニ因リ候儀有之且御許容有
之儀ハ固ヨリ所不信候間右宗民早速家ニ歸シ候様長
寄縣廳ハ御沙汰可有之候ハ必然ノ事ニ候且別紙届書ニ
因リ候時ハ島原ノ長吏只長寄縣廳ノ嚴命ニ依リ右様ノ

處置ニ及候由其段御取調弥左様ノ儀無之時ハ何者ノ責
ニ歸シ候哉吟味ヲ遂ケラレ度存候此段早々御廻答有之
様待入申候右ノ趣可得御意如足御座候以上

英國代理公使

十二月廿六日

エッオアダムス

副島外務卿

寺島外務人輔

閣下

別紙寫

届書寫

於島原千八百七十二年第一月

島原表ニ於テ切支丹人虐政相發シ切支丹宗門信仰ノ

為メ可憐者數百人召捕多半家ノ亭主タルモノ而已眷
族ニ隔テラレ破屋ニ入置甚寒ヲ凌カセ候故老人ハ寒
氣ニ感シ直ニ死去致候者數人猶卧病ノモノ無數ニ候
去ル廿六日迄取調候處未タ拷問ニ懸ケ候儀無之唯時
侯ノ難堪ヲ以テ改心為致候工夫ト相見申候右可憐モ
ノ相應ノ百姓獵師鑛山ノ仕事師種々有之右信仰ノ為
メ召捕ニ相成外ニ惡事ヲ致候處説ニ託シ候儀ニ無之
右宗民召捕候時島原ノ長吏ヲ諫止ル處長寄縣廳ノ嚴
命ニ從ヒ候事ニテ無余儀事ニ有之趣申聞候

伊萬里縣於テ異宗徒捕押候儀ニ付各國公使へ對話書并
ニ其他ノ書類共肝要ノ儀ハ出拔可差出旨御申越致承知
候右一件ハ英公使ヨリ申上候而已ニテ外公使トノ引合ハ
無之尤モ佛公使ハ薄々承及候由ニテ申出候儀モ有之候
ハトモ一言ニテ辨解相濟申候依テ英公使應接書畧寫
一通為御見合差進候也

申二月廿日

外務省

正院

御中

當縣管内彼杵郡大明寺村其外島々ノ儀僻遠ノ地ニテ頑
固ノ弊風有之迄前ヨリ屢説諭ヲ加候得共其効無之近來
ニ至テハ家業ニ怠リ比隣ノ交ニ疎リ病疾患難相救助ス
ルノ意ナク剩他ノ職業ヲ妨ケ候躰ノ儀モ有之遂ニハ村
邑ノ協和ヲ失ヒ自ラ生活ニ差支候事ニ可立至我モ難計
頑愚ノ族トハ乍申可憫次第ニ御坐候丈速速隔ノ場所打
迫ノ俟ニテハ取締方不行届ニ付親シク説諭ヲ加ヘ候為
六十七名佐賀元城下迄呼寄本心ニ基キ本分ノ職業致
勉勵候様懇々誘導致居候右ハ多人數ノ者取扱候事柄ニ
付此段御届申上候以上

辛未十二月

伊萬里縣

史官

御中

伊萬里縣、御沙汰馬

深堀人民ノ内説諭ノ為メ佐賀城下へ呼寄置候者トモ右
手数相濟候ハ、早々住所へ送返シ可申萬一未相濟儀モ
有之候ハ、長寄縣へ引渡可申事

去巳年中各地方官、御預ケ相成候異宗徒ノ中悔悟致候
者ハ御赦免相成候條管下民籍ハ編入又ハ本籍ハ戻歸ホ
本人ノ望ニ任セ厚ク世話可致事

但活計難相立者ハ窮民救助ノ規則ニ準シ見込ノ趣
詳細取調大蔵省ハ可申出事

壬申二月

太 政 官

是マテ日本諸侯、貸置候借債金御拂ニ相成候勘
定書

一金二十一萬六千七百五十兩	元高知藩借債
一金七萬九千三百七十二兩	元對州藩借債
一金壹萬四百四十三兩	元秋田藩借債
一洋銀十四萬六千三百七十九兩三十セト	同上 借債
一金八萬四百六十六兩	元二本松藩借債
一金五萬三千七百四十兩	元水戸藩借債
一金五千百六兩	元沼田藩借債

總計洋銀共

合金五十九萬二千二百五十五兩ト

洋銀三十セント

内洋銀十四萬六千三百七十九兩三十セント

大坂

右ハ前書ノ金五十九万二千二百五十五兩ト洋銀三十セ
ントノ高日本諸侯ノ貸置候所御拂被下正ニ請取申候処
確也右ニ付此借債證書其外勘定書付ハ七十一年第十
一月廿七日ニ不殘反故ニイタシ打消申候回テ右金子請
取書如是ニ御座候以上

明治四年十一月十六日
大蔵卿

閣下

證

一金五十九萬井也

右ハ一ヶ年六分ノ利銀相添前書五拾九萬弗ノ高ヲメキ
シコ弗或ハ日本圓ヲ以テ一ヶ年ノ後チワルスホール社
中江拂フベキヲ約定ス尤モ利足ノ儀ハ六ヶ月毎ニ相渡
可申事

明治四年辛未十一月十六日大蔵大輔井上馨

辛未十一月二十日
於東京サトウ、談
判済ノ上替金積
却證文請取済

ルカースヨリ嚴原烏山兩藩、掛ル砂糖
端物代差引残り同人ヨリ

嚴原藩、懸ル品物宛買代差引残り

右二口當十一月迄元利合

五萬〇八百八十九兩三十七セントノ處、

五萬〇四百四十四兩二分拂切

辛未十二月三日於
横濱ケル一言替金
積済同日収受取
済證書受取済

キルヘーヨリ犬山縣、懸ル形代并借用
金元利合

八萬四千六百十六兩十七セントノ處、

七萬九千兩拂切リ

辛未十月廿六日
京リトウ、皆金
海證文請取消

カヘルトヨリ

盛岡縣へ懸ル品物代

三千〇〇三弗ノ處へ

二千八百三十九弗掛切

オールトヨリ赤穂嚴原両藩、懸ル帛代

并品代普通元利罰金共合

辛未十月廿六日
東京ス、皆金
海證文請取消

十四萬八千七百二十弗ノ處へ

十二萬二千弗ニ掛切

勅旨之寫

理事官大藏少輔吉田清成

一新公債ハ凡ソ米貨千五百萬圓ヨリ二千萬或ハ三千萬
圓ノ實額ヲ目途トシテ募ルヘキ事

一右公債ニ付便宜公文ヲ以テ一般ノ布告ヲ為シ或ハ目
途ノ算計ヲ公示シ且要用ノ節ハ

勅旨ヲ以テ宣布公達スル事

一確賣ナル銀行ヲ撰テエセントヲ命シ特典ヲ與ヘ約束
ヲ結フヘキ事

一新聞紙ヲ以テ諸般ノ事ヲ公告シ或ハ其新聞局ニ免許
ヲ與ヘ又ハ約束ヲ定ムル事

一便宜コンミッターヲ與ス事

一時宜ニヨリ在留辨務使へ達シ留學生徒ヲ使用スル事
一公債ノ事務ニ付要用ノ事アラハ便宜具處置ヲ為スヘ
キ事

一若シ米國ニ於テ公債ノ事調ハズト察セハ直ニ英國ニ
赴キ之ヲ處置スヘシ

右委任ノ條件宜ク遵奉シテ恣ルヲ勿ルヘシ

明治五年壬申二月十五日

奉勅太政大臣後一位三條實美 華押

ギョルギビウイリムス

今般大蔵少輔吉田清成ニ公債ノ事ヲ委任シ米國ニ赴カ
シム汝彼カ補助トナリ能ク周旋シテ其事務ヲ修整シ我
國ノ利益ヲ計レ是レ朕カ汝ニ望ム所ナリ海路悠遠汝具
レ自愛セヨ

別紙概畧見込書下ケ札ノ内紙幣合八千万圓ノ高ヲ申年
ヨリロク拂殘ノ金高ヲ以引上支消イタシ都合廿三ヶ年
ニテ相済可申トノ儀ハ全目算マテノ事ニテ右紙幣トテ
モ右様公債證書ニ可相成筈モ無之且其有餘ノ金高ヲ算
計セハ右八千万圓餘ノ紙幣ハ廿三ヶ年ニテ支消可相成
ノ餘贏有之候儀ヲ計出候迄ニ有之候

武家華族家祿ノ惣計ハ九十万九百十石程ニ相成其内七
十万石ヲ剩餘致シ候割合ハ大高ハ多ク減省シ小高ハ少
ク減省スルノ方法ヲ相用候積ニ有之候

但士族卒ノ家祿ヨリ百二十万石餘ヲ剩餘スルモ同算
法ヲ相用候積

旧堂上ノ家祿ト賞典トニ論及セサルハ暫ク餘地ヲ存シ

候儀ニ有之候

武家華族并士族卒家祿減有ノ割合書ハ冊數モ多ク
候間差上不申候
右為念添書致シ候也

壬申二月十五日

吉田大藏少輔
井上大藏大輔

大久保大藏卿殿

伊藤工部大輔殿

自辛未十月
至壬申九月

歳入出并國債凡積帳

凡例

穀高負數ノ左側、朱書ヲ以代金ヲ顯ハスハ一石金四兩
ノ位ヲ以歲入出ノ比較ニ充金穀負數ノ額、朱○ヲ附ス
ルハ概シテ生財費トシ其他ハ消費トス

高二千二百二十石五升二合壹斗八毛
 内
 高九百万千六百一十一石五升二合壹斗八毛
 去年年比凡積
 府 并 旧 縣
 此租稅 但免三ツ一毛余
 △ 米二百三十六万二千七百七十七石壹斗九升四合二勺五毛
 内
 米百十四万六千三百七十六石四斗六升六合二勺五毛 正米納
 米百二十一万四千九百七十七石二升八合 石代納
 米此代金四百八十五万九千六百二兩三分余 但壹石四兩
 一金四十一万四千六百八十六兩余 但租及高伏
 繩場金納

歳入

高二千二百二十万千六百一十二石五升二合壹斗八毛

内

高九百万千六百一十一石五升二合壹斗八毛

去年年比凡積

府 并 旧 縣

此租稅 但免三ツ一毛余

△ 米二百三十六万二千七百七十七石壹斗九升四合二勺五毛 正租及高

内

米百十四万六千三百七十六石四斗六升六合二勺五毛 正米納

米百二十一万四千九百七十七石二升八合 石代納

米此代金四百八十五万九千六百二兩三分余 但壹石四兩

一金四十一万四千六百八十六兩余 但租及高伏

繩場金納

一 米三万二千四百二十四石

雜稅

内

米一万五千七百四十一石五斗二升八合 正米納

米一万六千六百八十二石四斗七升二合 石代納

朱此代金六万六千七百二十九兩三分余

一 金四十二万二千六百七十四兩壹分余 雜稅金納

小以米百十六万二千百七十七石九斗九升四合二勺四毛

金五百七十六万三千百九十二兩三分余

△高二千三百六万三千二百八十石八斗一升四合七勺六毛 五ヶ年平納 租稅

此租稅

一 米八百三十五万七千九百七十七石九斗三升二合七勺一毛 正 租

一 金九十五万八千九百十九兩二分 永百九文三分一厘三毛 右今斷

一 米五十一万五千六百六十石八斗四升五合五勺七毛 雜稅

一 金百三十六万二千九百九十六兩永七十四文四勺九毛 右今斷

小以米八百八十七万三千六百三十八石七斗七升七合九勺七毛

朱此金三千五百四十九万四千五百五十九兩永百十壹文九分 西

金二百三十一万九千二百五十九兩二分永百八十三文七勺二厘壹毛

朱右各藩租稅旧府縣并比較收額凡續

朱總計米六百三十七万二千八百三十五石九斗二升八合

此金二千五百四十九万四千三百四十三兩永七百十二文 但石四兩

金二百二十万二千三百三十六兩永五百九十六文九分

合金二千七百六十九万三千四百八十兩永三百八十九分

雜科、部

一金八万八千九百八十五兩

東京府下稅

一金七万五千百五兩

大阪府下稅

一金千百八兩

伊豆七島稅

一金一万三千四十七兩	御拂馬并牛酪
一金九十万兩	造酒醬油稅
一金十五万兩	蠶種紙稅
一金九千七百五十兩	牛馬鑑札稅
一金四十二万八千二百五兩余	諸掛物
金十一万九千六百九十四兩	口米延米
金七十三万七千六百三十九兩余	國役金
金十七万三千五百二十五兩余	横濱諸稅
金六万三千九十九兩余	兵庫諸稅
金千五百四十二兩余	長寄諸稅
金三千百五十五兩	新瀉諸稅
金二千四百三兩余	名國公使館家稅
	牧牛馬掛上納

一金八千九十兩余	東校上納
一金三万七千六百九十二兩	製鐵所上納
一金五百七十六兩	電信局上納
一金五十万兩	雜科 官林損本掛 欠明場等
一金五千四百三十二兩	駄通納稅
一金三十五万兩	造幣益金
一金二万八千四百六十一兩	上水稅
上米千三万五千七百五十六石七斗七升二合二勺一才一毛	
朱此金四千十四万三千二十七兩水八十八石八分四厘四毛	
金千百七十七万五千九百十六兩水四百三十三石七分二厘一毛	
總計金五万九千九百八十八石九百四十三兩水五百二十二石五分六厘九毛	
朱元各藩租稅府縣並比較	
朱米七百五十三万四千九百五十三石九斗二升二勺二才四毛	

此金三千九百三十九万九千八百十五兩二分水百八十八分九厘六毫

金千六百六十五万八千八百三十七兩水三百四十六分九厘

朱總計金四千七百七十九万八千六百五十三兩水三十五分八厘六毫

本數總計

朱金千十二万二百九十兩水四百八十六分七厘九毫 減

歲出

官省定額

官内有

金三十八万八千兩

外務省

金二万八千七十六兩

内

壹万八千兩

本省

六千兩

文書司

二千兩

西洋語学

二千七十六兩

支那語学

兵部省

金九百八十万兩

内

八百方兩

陸軍資金

百八十万兩

海軍資金

大政官

北海道開拓

○金五十万兩

○米一万四千石

合計

金三十八万八千七百六兩

官省毎月平均 一年概算

太政官

九金一万二千八百兩程

神祇省

九金七千兩程

集議院

九金千三百兩程

司法省

九金二万七千兩程

米千三百九十三石程

文部省

金二十九万六千四百兩

洋銀四万八千二百四十元 外國人三付入

此内譯

金七万二千兩
金十五万七千兩程
金三万五千四百兩

足額東南校共
外國留學費
大阪學校

金九千兩

開成野定額
同教師月給

金一万二千兩
金五千四百兩

醫學校定額
同教師月給
長寄學校

金三万二千兩

金二万兩
金七万二千兩

開病院

大藏省

金百三十六万三千六百七十六兩

米六百十四石

内

金二千兩
金千七百四十兩

判理局
租稅寮貢米納會所

金二千八百七十三兩
米六百十四石

同淺草蔵

金五十五万兩
金五十五万四千八百八兩

出納米運賃
出納金穀運送

金五万三千六百四十三兩

同金穀運送

金二万三千六百八十五兩

勸農寮收牛用鑒

金三万九千二百三十三兩

外國人雇料

金二万四千兩

省中公費用度課

金四十一万〇八百三十四兩 大阪出張所取扱

金三十六万八千六百廿兩

月給出納府并出張在勤官費

金二万五千七百七十六兩

旅費月斷
雅樂局用費

金四千二百兩

司法省出張月費

金四千二百兩
金七千九百三十八兩

出納寮出張所
租稅寮出張所

金七万兩

紙幣製造入費

工部省

金三百三十六万兩 月二十八万兩

燈臺 傳信 製鐵 鐵路 礦山 工學

合計金五百十壹万百十六兩

米二千七石

府 縣

東京府

九金八万六千四百兩程

米五千七十六石程

内訳

金七万二千兩
同壹万四千四百兩

府定額
運上額

米二千三百石
同二千七百七十六石

府定額
府学校

金五十万兩

ポリース入費

大阪府

九金十七万四千三百〇五兩程

米二千六百五十石

京都府

九金十二万八千八百六十五兩

米千八百石

金壹万二千兩 府学校

縣

七十二縣

元金二百四十三万九千八百七十八兩

米十九万七千三百石

内

金百六十三万三千七百九十八兩

官負月給

金三十一万九千五百兩

第一常備

金二万五千兩

祝壽

金十三万六千四百兩

雜科

貢米廻漕 旅費 扶持給料 急破管轄
急難手當 捕亡 捨子養育 具外共

金四万九千三百兩

救恤貸渡見込

水火災 種粉拜借 急扶食ノ部

合計金三百三十三万四千四百四十八兩

米二十万六千八百二十六石

開港場

横濱港

凡金三十一万三千八百八十五兩余

兵庫港

凡金五万二千九百五十八兩余

長崎港

凡金六百三千〇九十九兩余

新潟港

凡金七万三百五十九兩余

合計金四十九万七千八百壹兩

合記金四十一万五千六百一十兩
山金三十三万五千八百一十兩
山金六万三千五百一十兩
山金五万二千五百一十兩
山金三万二千五百一十兩
山金二万二千五百一十兩
山金一万二千五百一十兩
山金五千二百五十五兩
山金二千五百一十兩
山金一千二百五十五兩
山金六百二十五兩
山金三百二十五兩
山金一百二十五兩
山金五十兩
山金二十五兩
山金十二兩
山金六兩
山金三兩
山金一兩
山金半兩
山金一分
山金一分一厘
山金一分二厘
山金一分三厘
山金一分四厘
山金一分五厘
山金一分六厘
山金一分七厘
山金一分八厘
山金一分九厘
山金一分一毫
山金一分二毫
山金一分三毫
山金一分四毫
山金一分五毫
山金一分六毫
山金一分七毫
山金一分八毫
山金一分九毫
山金一分一絲
山金一分二絲
山金一分三絲
山金一分四絲
山金一分五絲
山金一分六絲
山金一分七絲
山金一分八絲
山金一分九絲
山金一分一忽
山金一分二忽
山金一分三忽
山金一分四忽
山金一分五忽
山金一分六忽
山金一分七忽
山金一分八忽
山金一分九忽
山金一分一微
山金一分二微
山金一分三微
山金一分四微
山金一分五微
山金一分六微
山金一分七微
山金一分八微
山金一分九微
山金一分一沙
山金一分二沙
山金一分三沙
山金一分四沙
山金一分五沙
山金一分六沙
山金一分七沙
山金一分八沙
山金一分九沙
山金一分一渺
山金一分二渺
山金一分三渺
山金一分四渺
山金一分五渺
山金一分六渺
山金一分七渺
山金一分八渺
山金一分九渺
山金一分一漠
山金一分二漠
山金一分三漠
山金一分四漠
山金一分五漠
山金一分六漠
山金一分七漠
山金一分八漠
山金一分九漠
山金一分一太
山金一分二太
山金一分三太
山金一分四太
山金一分五太
山金一分六太
山金一分七太
山金一分八太
山金一分九太
山金一分一極
山金一分二極
山金一分三極
山金一分四極
山金一分五極
山金一分六極
山金一分七極
山金一分八極
山金一分九極
山金一分一沙
山金一分二沙
山金一分三沙
山金一分四沙
山金一分五沙
山金一分六沙
山金一分七沙
山金一分八沙
山金一分九沙
山金一分一渺
山金一分二渺
山金一分三渺
山金一分四渺
山金一分五渺
山金一分六渺
山金一分七渺
山金一分八渺
山金一分九渺
山金一分一漠
山金一分二漠
山金一分三漠
山金一分四漠
山金一分五漠
山金一分六漠
山金一分七漠
山金一分八漠
山金一分九漠
山金一分一太
山金一分二太
山金一分三太
山金一分四太
山金一分五太
山金一分六太
山金一分七太
山金一分八太
山金一分九太
山金一分一極
山金一分二極
山金一分三極
山金一分四極
山金一分五極
山金一分六極
山金一分七極
山金一分八極
山金一分九極

常費定額

賞典

米二十二万七千石

質属祿 宮元官武華族士卒族共

九米三十万千百石余

金二万五百三十三兩

廢藩華族祿

米九十万九百十石

同士卒族祿

米三百二十九万六千三百六十四石二斗

金壹万五千二百五十九兩

招魂社

米二千五百石

十津川郷士

米五千石

合計 米^{四百七十三万二千八百七十四石二斗}
三万五千七百九十二兩

常費毎月平均ヲ以一ヶ年ヲ概算ス

官祿 官省

九金百三十万兩

旅費

九金三十八万兩

宮繕

九金四百五十万兩

内^{三百五十万兩}

宮^提繕^防

上水

九金三万千六百二十二兩

勅祭

九金十萬兩

合計金六百三十一万千六百二十二兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

金百五十万兩

臨時雜

外國交際

金五十万兩 内金四十万兩

大使洋行諸費

佐波鑛山

工部省定額ノ分

金九万五千兩

居切村堀割

金六万兩

富岡製糸場

金十万兩

楮幣改造

金七十七万兩

外國債濟

金百五十万兩

同利足 元積英金八十九万九百封度年九分ノ利并口銭共

九金三十七万兩

越後川堀割

○金四万五千兩

郵便改正

○九金拾万兩

土地測量

九金十萬兩

開拓使貸附

金百五十万兩

内

金八万四千五百兩 返濟ノ年額金ノ内ニテ

差引

○金百四十一万五千五百兩

全渡高

舊石藩官祿

壬申六月ニ至悉皆廢止ノ積

九金百二十七万兩

壹ヶ月金十四万五千八百十兩余

總計

金三千三百九十三万二千五百五兩

米四百九十七万三千七百七石二斗

朱此金千九百八十九万四千八百二十八兩永八百文

合金五千三百八十二万七千三百三十三兩永八百文

下札 内

金六百九万九千八百八十五兩
米七万六千九百石

朱此金三十万七千六百兩

合金六百三十九万八千七百八十五兩 生財費

殘 四千七百四十二万八千五百四十八兩永八百文消糜

歳入
差引

金百九拾万八千三百九十兩永二百七十七文四分三厘九毫不足

新縣租税旧府縣並ニ比較
差引

金千二百二万八千六百八十兩永七百六十四文一分六厘四毫 不足

外

金

元大中藩三十九成兵
三十九小隊、費用

内國債

出納
改高

紙幣
見込
負債
見込

一金五千五百五十四万八千六百八兩

楮幣流通高

戊辰年四月八日
札引去殘高

一金三千三百三十万九千二百八兩

元各藩楮幣流通高

一金五千九百六十五万兩

右同斷負債高

朱此九月
金高六千万兩下見据

千六百五十四万三千八百六十兩
千三百四十二万三千二百二十兩

天保十四年
右同年以後外年迄、分

三千三万五千八百二十兩

石高貸下引

残八百万兩余
或二千二百三万兩

小以金一億三千六百八十五万九千九百九十六兩

外國債

一洋銀百五十万弗

下ノ関債金并スヲ西ニ

朱返濟期限千八百七十二年五月十五日

英金百万封度公積ノ内千八百七十年九千百封度證券

買上殘 封度四兩二分二算又

一洋銀八十九万。九百封度

此金四百万九千五十兩

一几金三百万兩

元各藩負債高

小以金八百五十万九千五十兩

内外國債

合計一億四千五百三十六万四千四拾六兩